

kinokopress.com
www.kinokopress.com

天翔け地這う

第五卷 オセロ作戦 3

生野以久男

第一章

1

「手遅れだったか……」

黒装束を纏った異様な風貌のひとりの男が呟く。骨と皮だけの瘦せた体なのに、背丈が飛び抜けて高い。鼻は細く尖り、目だけがいやに大きい。その大きな目で睨まれると、二つのゴルフボール大の眼球が野球ボールのような大きな目となり、分厚い鉄板をも射抜くような迫力があつた。

男のまわりには数人の黒いスーツの男たちが取り囲み、辺りに鋭い視線を向け、警戒している。

「議長、ご用ですか」

彼の唇の動きを察知したのか、そのなかのひとりの男が近寄る。秘書のひとりだ。

「うん……」

彼は前面に広がる森林に目を向けたままだ。森林といつても、巨木はない。疎らに生えている高木に立ち枯れがやたらに目立つ。地球温暖化による気候帯変動で生じた気温上昇に適應できないのか、それとも……。

身を屈め、手の平で土を杓ると、鼻に持つていく。土の臭いのなかに、薬品のような刺激臭が混じっている。なんの匂いか。彼は記憶をたどる。

確か、一度これに似た臭いを嗅いだことがあつた。だが思い出せない。

「この臭いは……」

近寄ってきた男の鼻先に土の手を突き出す。

「よく分かりませんが、有機塩素系の合成化学物質のように思えます。たとえば、合成化学物質Xか、それとも、ダイオキシン類か……」

男は土に鼻を近付け何度も嗅ぐが、判然としないのか言葉を濁す。

合成化学物質Xは環境ホルモン（内分泌攪乱合成化学物質）の一種で、「黒の集団」が開発したものであつた。これに対して、ダイオキシン類は塩素を含む化学物質だ。ダイオキシン類とは、塩化ビニールなどの不完全燃焼（三〇〇度程度の低温燃焼）あるいは農薬や薬品類の合成するときに、意図しない副生成物として生成されるポリ塩化ジベンゾパラジオキシン、ポリ塩化ジベンゾフラン、ダイオキシン様塩化ビフェニルの総称である。これまでさまざまな毒性が指摘されてきているが、合成化学物質Xと同様に、これらにも環境ホルモン（内分泌攪乱合成化学物質）的作用がみられる。

男の言葉を聞いているのか、それとも聞こえないのか、彼は前方へ目を向けたまま、手の平の土を払い落とす。

「日本地区本部が産業廃棄物処理業者と問題を起こしていたことがあつたが、あれはすでに解決しているのか」

「はあ……、焼却炉爆発事件のことですか……」

「あのあと、関係していた男女ふたり連れの監視をつづけていたようだが、その後、あのふたりはどうなったのか」

「はい。早速、調べます」

秘書はまだ前方へ目を向けている議長を残したまま踵を返えすと、身を翻し、議長のもとを離れた。

2

「代表、土田教授へ委託した調査の件ですが……」

これは山城が代表の許可を得て進めていた案件だった。彼は執務机であらぬ方に目を向けたまま、微動だにしない代表の顔をじつと見る。いつもの脂ぎった精悍な顔と違い、艶もなく、どこか萎れた感じがする。

「うん……」

しばらくして、代表は徐に目を上げる。記憶は正常なのだろうか。

「教授が国際会議に出席する折に、海外における環境ホルモン（内分泌攪乱合成化学物質）規制の動向を調べてもらうことにした件ですが……」

彼はさらに説明を加える。これは環境行政担当者と昵懇な教授を通して、権力中枢へ接近するために打った布石だった。だがこの点は敢えて伏せておいた。伏せていても、以前の代表なら十分分かつてははずなのだ。

代表の目を覗き、彼はじつと反応を伺う。代表は自分を捕らえ、亡き者にしようとした。だがこの記憶は消えてしまっているのか。

彼がドアを開けて執務室に入っていた時、代表は彼の顔を見てもなんの反応も示さなかった。それで代表の承認のもとに進めていた土田教授の件を持ち出し、以前の記憶を確かめようとしたのだった。

代表は彼に目を据え、目を凝らしてじつと彼を見ている。彼も負けじと代表の目を覗き込む。

執務机越しに、二人の睨み合いがつづく。彼はふと、代表の目の奥にレースのカーテンのような薄い幕が張り巡らされているのに気付いた。

「（おい、一体、あれはなんだろうか）」

彼は一体同化している耀に話しかける。彼はさらに一步執務机に近付き、代表の目の中をじつと覗く。

目の中で、薄い幕が細かく揺れている。よく見ると、幕が揺れているのではなかった。眼球が微妙に痙攣しているらしい。

「（おい、あまり近づくな。アブナイ。あの男は狂っているぞ）」
耀だ。

「（お前にも見えるのか）」

彼は訝る。なにか変だ。頭のなかにヨウのほかになにか異物が侵入しているような感じがするのだ。

「（よく見えないが、異様さを感じるのだ。それにあの男の体にはダイナマイトが仕込まれているそうだ。いつ破裂するか分

「からんぞ」

微かに、体が揺れる。誰かが合図しているのか。

「(ヨウ、いまがチャンスだ。代表にもう少し接近するように言ってくれないか。代表と一体同化する。やつの脳を確かめてみよう)」

低い声がした。山城のなかに潜入してきたハクリだった。ヨウと打ち合わせして、代表と一体同化するチャンスを狙っていたのだ。

「(分かった。ダイナマイトに気を付けて)」

「(よし、いまだ。行くぞ)」

ハクリが山城から出て代表へ飛び移る。

「(ケン、もういい。代表から離れるんだ)」

「うるさい。近づけの、離れろと、一体どっちだ」

「(仲間のハクリが代表の脳の状態を調べに体内に入っていたんだ。しばらく、離れたところで様子を見ていたらいということだ)」

「(うん……、分かった)」

彼は身を引いて、執務机から後退する。代表は驚いて顔を上げる。彼は何事もなかったかのように、さらに足を後ろに引く。

「それでどうしたんだ、その件は……」

代表は大声を出す。

「その件ですか……」

「そうだ、その件だ」

相変わらず、大きな声だ。彼はじつと代表を見る。ふと、代

表は「その件」と言っているが、「その件」がなにか理解していないような気がする。

「実は、議長がすでに日本に……」

彼は口からでまかせを言う。

「なんだと……」

「まだ確認が取れずにいるのですが、一応、お知らせしておいたほうがよいかと思ひまして……」

もちろん、そんな情報は入っていないかった。だが彼は用心深い議長のことだから、多分、隠密裏に運ぶにちがいないと思っていた。事前に訪日しておいて情報は後から流すような手は十分考えられるのだ。

代表は急に椅子から立ち上がると、彼がそばにいても忘れ、ぶつぶつ言いながら、執務机の周りを回りました。彼は代表に気付かれないように後退し、後ろ手でノブを掴み、ドアを開けて室外へ抜け出た。

3

「あの音、なにかしら」

木実子は大きな食卓用テーブルで向かい合っている森野におびえた目を向ける。彼女は息を殺して、じつと聞き耳を立てる。

ふたりは入院していた病院から退院して、一時的に、彼女の實家に身を寄せていたのだ。彼女には實家に帰るつもりはなかつ

た。このリビングで灯油をかけられ、焼き殺されそうになったのだ。こんな現場を見たくなかったし、二度と戻りたいとは思わなかった。だが娘の帰りを待つて、ひとり残っている母が気掛かりだった。

玄関のほうで微かに金属性の音がする。

テラスに面したガラス戸からレースのカーテン越しに差し込む光も急速に力を失い、リビングには夕闇が刻一刻広がり出していく。彼女は椅子から立ち上がり、灯をつけたかった。だが身体が硬直して動こうとしない。

ノブが回る音がした。ドアが開いた。廊下を歩く足音が近づく。

リビングのドアが押され、すき間から手がのぞく。つづいて、スイッチが鳴った。天井の照明器がまぶしい光を放つ。

「だーれ……」

「まあ、お母さんだったの……」

「こんな暗いところで……。灯をつけたらいいのに……」

貴世は森野を一瞥する。

「お母さん、鍵掛けた」

「あ、まだかしら……」

「直ぐ、鍵掛けなくちゃ」

木実子は玄関へ飛んで行く。

「助けて……。早く、誰が来て……」

玄関のほうから、彼女の悲鳴がした。森野が飛び出す。貴世がつづく。

「お前は……。安井金平だな」

森野が前に出る。

「近寄るな」

大男が木実子を腕をねじ上げ、首にナイフの刃を付ける。

「早く、一一〇番して……」

彼女は首筋のナイフに目を向け、叫ぶ。

「動くな。動いたら、この女を刺す」

大男はにじり寄ろうとする森野と貴世を制す。

「……………」

「こんどこそ、こいつは死んでもらう。この女にはさんざんな目に遭わせられたから、この女をもさんざん苦しめてやらなければ……。お前たちも一緒だ」

大男は強く木実子の腕をねじり、彼女を床に押し倒し、背中に足を乗せて押さえつける。そして素早く足元に置いてあるポリ容器のフタを取り、前へ倒す。

ポリ容器の口から透明の液体がとくとくと流れ出した。石油臭が一面に漂う。

灯油が廊下を広がっていく。灯油は木実子に迫る。床に俯せている木実子は顔を背けて必死に逃れようとするが、瞬く間に灯油は広がり、顔面を濡らす。森野と貴世の足元をも濡らしていった。

必死に顔を背け、灯油から逃れようとする彼女を踏みつけ、大男はポケットからライターをとり出す。そしてその手を伸ばし、火を点ける。

その瞬間、森野が大男めがけて飛び込む。大男は身をかわし、片手で飛んできた森野を床に払い落とす。森野は重い音を発して廊下に叩きつけられた。その拍子に、顔を強か打って、伸びてしまう。

大男は身を屈め、木実子の髪を灯油に浸し、ライターの炎を近づけていく。

「止めて……、お願い、止めて……」
貴世が悲鳴を上げる。

一瞬、大男は目を上げ、貴世を見た。木実子がもがく。大男は足に力を加え、彼女の動きを抑えかかる。

つぎの瞬間、火の点いたライターが大男の手から離れて宙を飛んだ。大男は呆気にとられ、飛んでいくライターを目で追う。ライターは弧を描き、天井すれすれを飛んで廊下の奥へ飛んでいった。

大男の足の力が緩んだ隙に、木実子が男の足を跳ねのけ、立ち上がる。その拍子に、大男がバランスを失い、尻餅をつく。

大男は慌てて、立ち上がろうするが灯油に足を取られて転びそうになる。ふらつきながら体勢の建て直しをはかる。

その瞬間、貴世が大男の背を強く押した。さらにバランスを崩して大きくふらつく。前のめりになったところを、木実子が足を払う。勢いよく、大男は前のめりに倒れ込み、廊下の床に顔を打ち付ける。

一瞬、大男は意識を失ったのか、そのまま伸びてしまう。だが直ぐ、大男は立ち上がろうとかがき出す。そして一度立

ち上がる。そこで木実子がもう一度逆から大男の足を払う。男は仰向けに倒れ、後頭部を強か打った。

「一一〇番ね……」
「あ、火が……。お母さん、消火器は……」

消えたと見えたライターの火がくすぶっていたのか、廊下の奥で黒い煙が立上りはじめている。

「早く、森野さんを外へ出さないと……」
彼女は廊下を塞ぐように伸びている大男を引きずり出す。ド

アを腰で押し、玄関から庭へ引きずっていく。廊下が灯油で濡れているせいか、思ったよりも軽かった。つづいて、森野の腕を引いていく。森野の身体は滑るように軽々と引き出せた。

ふたたび玄関に戻ると、廊下の奥へ走る。彼女は貴世の手から消火器を奪うと、燃え上がり出した火元へ噴射口を向ける。

火が廊下の灯油に燃え移った。火が廊下一面に広がり、めらめらと大きな炎を立上らせた。炎は壁を這い、天井を焦がし、階段を上り、二階へ飛んでいく。

「もう、ムリだわ。お母さん、一一九番へ電話して……」
だが貴世は思うように動けないのか、うろろろしている。

「お母さん、早く……」
「ああ……、動けない」

腰を抜かしたのか、貴世は手を振るだけで、蹲くまっしてしま

う。
木実子は消火器を捨て、貴世を抱え、玄関へ向かう。火が追いかけてくる。灯油に濡れたスリッパに火がついた。

彼女はスリッパを脱ぎ捨てる。裸足で玄関の土間に下り、ノブを回す。抱えている貴世の身体でドアを押す。

ドアが開いた拍子に、炎が大きくなった。外へ飛び出し、彼女は貴世とともに庭に倒れ込む。

頭髮が焦げた臭いがする。灯油に濡れた足に火がついている。彼女は貴世から離れ、急いで上着を脱いで炎を叩く。

火は消えたが、火傷を負ったのか、足の甲がひりひりする。彼女は貴世を探した。貴世は庭の片隅で蹲っていた。彼女は母を抱え起こし、隣家との堺にあるブロック塀に背を押し付け、玄関を振り返る。

玄関横の明り取りガラスが奇妙に赤い。廊下の灯油が燃え上がっているのだろうか。やがて家中に火が回り、火を噴き出すことだろう。

彼女は全身を震わしている貴世を抱きしめながら、家が炎に包まれ、燃え尽きていく様子を想像していた。そのときはじめて森野と大男の姿がどこにも見当たらないことに気付いた。

サイレンが近づいてくる。点滅する赤色ランプが見えた。

数人の黒い人影が見えた。近づいてくる男たちに見つからないように、彼女は身体を小さくして息を潜めた。

4

一面闇の中だった。代表と一体同化したはずなのに、ハクリ

は自分がどこにいるのか分からず、戸惑う。だがそれは一瞬だった。闇の中に光が見えた。そして光が次第に広がっていく。

ハクリは大きく息を吸った。

アムンの命を受け、ヨウを連れ戻すはずだった。だが「黒の集団」を撃滅する千載一遇のチャンスだというヨウの言い分を聞き入れ、逆に、山城（ヨウ）連合に加勢するはめになってしまったしまったのだ。

確かに、代表ともども議長を倒すことができれば、「黒の組織」を壊滅させることができるかもしれない。そして議長が訪日している今がそのチャンスなのだ。かといって、どうやって代表と議長の二人を同時に潰すのか。一人でも大変なのに、どのようにすれば、二人を同時に倒せるのか。

ハクリはヨウと話し合っているうちに、ひとつのアイデアを思いついた。代表に謀反を囁けるのだ。そして代表と議長を戦わせるのだ。そしていまそれを実行しようとしているのだ。

「（とくに、変わったところが見当たらないぞ。だが脳の動きがかなり鈍っているようだ……）」

ハクリはぶつぶつ呟きながら、代表の脳の回路を順々とチェックしていく。どこにも変なところはないようだが、活動が鈍い。全体が弱っているらしい。

「……………」

ハクリのぶつぶつが聞こえるのか、代表は盛んに首をかしげる。そして側頭部をときどき拳でガンガン叩く。

「（あまり頭を叩くものではない）」

「え……」

「（お前さんに特別の情報を提供しよう）」

「誰だ……」

「（お前さんの身体にボタン状物体が五つ埋め込まれていることは知っているな）」

「え？ なんのことだ」

「（知らなければ知らないでいい。だがそれは爆薬だ。気を付けるんだな。自分の身体に爆薬が仕掛けられていることを決して忘れるな）」

「ふむ……。そういえば、一度それらしいものを夢で見たことがあるが、あのボタンが爆薬だと……」

「（思い出したか。お前さんが体内に抱えている爆薬の起爆装置は外から操作され、いつでも爆発させることができるのだ。分かったか）」

「なんでそんなことを知っているのだ。そして……」

「（お前さんのために教えているのだ。誰が起爆装置のリモートコントロール用端末機をもち、自在にスイッチを押すことができるか分かっているだろうな）」

ハクリはしばらく無言で、じつと様子を窺う。

「……………」

代表も無言だ。だがハクリには代表の脳が混乱して激しく攪乱していることが手に取るように分かっていた。

「（不必要に動くな。無闇に抵抗するな。余計なことを口走るな。この三つを守るんだ。決して忘れるな。いいな）」

「うーむ……。なんとか取り出すことはできないのか、爆薬を……」

「（ムリだね。それを体外へ取り出すと酸化が急速に進み、自然発火して爆発するようだ。取り出すことに成功しても、爆発で命を失うかもしれない。そのまま、体内に留めておけば、決してひとりで爆発することはないがね。それともリモートコントロールを握っているやつを排除するか。そして『黒』を乗っ取り、安楽に暮らすか）」

ハクリは盛んに喉ける。

「お前は誰だ。どこにいるのだ」

「（お前さんの体内にいる。だがもう出る。一緒にいると危険だからな。無理心中はゴメンだ。とにかく、起爆装置をリモートコントロールするやつがいることを忘れるな。一刻も早く、そのやつを排除することだ。じゃあな）」

ハクリは最後にもう一度ダメを押す。

「待ってくれ、まだ聞きたいことがある……」

代表の声がした。だがハクリはかまわず抜け出る。もう用は済んだのだ。そして最後に代表の頬を軽く撫で、お呪いをかける。それから、ハクリはドアの隙間から外へ出ていった。

代表は執務机から動くことができなかった。彼は身体を椅子に凍結したまま、いまのやり取りを何度も繰り返し返していた。自分の意思で繰り返し返そうと思わなくても、頭のなかで、まるでエンドレスのテープのように、ひとりで同じことが止めどなく

繰り返されていくのだ。

不意に、脳裏に五つのボタン状物体が浮かんだ。夢に見たものだった。

「やはり、あれは『身も心も捧げる』と絶対服従を誓ったあのときに埋め込まれたにちがいない」

もはや疑うことない。彼は絶対服従とはこういうことかと思っただ。それは絶対者に点火のスイッチを握られた爆薬を身体に抱え込むことだったのか。

大きく息を吐く。一瞬、リモートコントロールのスイッチを握っている男の顔が浮かんだ。彼は直ぐ否定したが、排除できないなら排除したいと思っただ。

心臓がパクパクする。彼は落ち着かせようと、必死に何度も深呼吸を繰り返す。彼にはただこうすることしかできなかつた。

それでもリモートコントロールのスイッチを振り回す男の顔が何度も浮かぶ。必死に打ち消す。彼は同じことを何度も繰り返す。

突然、ドアが激しくノックされた。返事するまえに、ドアが大きく開かれた。

5

ハクリだ。アムンが執務機の書類から目を上げる。

「ヨウはやはりダメでした。何度も戻るようにと説得したのですが、山城から離れようとしなないので。それで代表の脳に仕掛けをしてきたのですが……」

「そうか」

彼は短く言って、しばらく宙を見ていた。

「ミサは……」

ハクリはしばらく彼の様子を窺っていたが、我慢し切れなくなつて尋ねる。

「一度戻ってきて、また出かけたところだ。火事が心配だと言つてね。ところで、彼女は議長がすでに訪日していると言つていたが……」

アムンはミサの報告の一部始終をつづける。

例の大男がまた現れてヨウの実家に灯油を撒いて火を放つたそうだ。

大男と木実子の連れの男森野が格闘の末、ともに伸びてしまふ。意識を失っていたので、木実子に手伝ってひとまず二人を外へ運び出しておいたところ、不意に、数人の男が現れた。

男たちは大男と森野の口をテープで塞ぎ、小脇に抱えるようにして運び出す。二人を拉致しようとしていることに気付き、ミサは男たちのあとを追つた。

二人は近くのホテルへ運び込まれ、いま、一室に閉じ込められているという。

「只今戻りました……」

「その男たちが議長の手勢だというのですか」

「ミサはそう思っている。それでとりあえず報告にきたのだが、火をつけられた家に残っている木実子さんらのことが心配で引き返して行ったところだよ。ミサは男たちが木実子さんらをも連れ出すにちがいないと言っていたが……」

「そうですか。一寸、様子を見てきましょう。もしかしたら、火事になって、ミサが困っているかもしれない」

ハクリは彼の返事を聞くまえに飛び出してしまふ。

彼はかなり長い間、ハクリが去っていったほうを凝視していた。そして「火炙りか、プリミティブだな」と呟く。

彼は内心、例の大男が二度にわたって木実子を火炙りにしようとしたことに驚いていた。たとえ産廃処理用の焼却炉を爆破されたからと言って、その仕返しに、木実子を火炙りにしようとしたことがあまりにも原始的に感じるのだ。それも二度も同じ方法だったとは、彼の理解を超えたことだった。

「もしかしたら、地球人類は始原に戻りたがっているのだろうか……」

彼はヨウやミサつを思い浮かべ、自問自答する。

それも人類が誕生した七〇〇万年前でもなければ、地球に生命が生まれた四〇億年まえでもない。それは地球が存在する現宇宙が生まれたときなのかもしれないのだ。

人間が現在享受する現代科学技術文明は日々発展しているようにみえる。科学技術に携わる人びとも、なんら疑うことなく、日進月歩、進歩をめざして研究を進めていると思っっているにちがいない。

だが自分たちが棲息する地球環境を自ら台無しにしてしまっている現代科学技術文明が進歩しているとは思えない。彼にはむしろ、逆の方向に進んでいるようにしか思えないのだ。

地球は何十億年という長い年月を費やし、地上を生物（生命）の生息に適した環境に造り上げてきた。と同時に、生物（生命）の側でもそうした環境に適応して自らの生体を構成し、機能させてきたといえるのだ。

たとえば、地表に出ている有害物質や毒物も雨水や流水に洗われたり、地殻変動や火山噴火で地中深く埋め込まれたりして地表が清浄になると、地表に多様な植物や動物を育てて複雑な生物生態系を整備していった。そして地上を人類という高等動物の棲息に適した住み処に変えてきたのだ。それがどうだ。

この一〇〇年から二〇〇年のうちに、人類の現代科学技術文明によって、地球は大変貌をしてしまっている。地中から石油や石炭などの化石燃料やさまざまな鉱物資源を大量に掘り出しては浪費しつづけてきた。大量のエネルギーを湯水のように使い、揚げ句の果てに、大気中の二酸化炭素濃度は二倍近くに増えてしまっている。

その結果、地球では地球温暖化が現実のものとなりつつある一方で、さまざまな資源の枯渇が現実のものとなりつつあるのだ。そのうえ、地中から掘り出した石炭、石油やさまざまな鉱物のために地表をもすつかり汚染し、土壌や河川をすつかりダメにしているではないか。

さらに、それらを大量消費大量廃棄システムを通して、さま

さまざまな合成化学物質を地上にばらまき、さらに大量の廃棄物を放置放出し、大気ばかりではなく、海洋や土壌をも地球規模にわたりすつかり汚染してしまっているのだ。

自分たちの住み処を年々悪化させているのは、どんなに交通機関が整備されて便利になろうと、また、どんなに食品の種類が増えて贅沢な暮らしができようと、現代科学技術文明が進歩しているとは言えないのではないか。

日々進歩しつづける現代科学技術文明のもとで、人間が毎日呼吸したり飲んだりする空気や水が有害物質でますます汚染され、毎日食べる食糧や食品が合成化学物質でますます汚染されているとすれば、現代科学技術文明とは人間にとって一体何なのか。

地球は長い歳月を費やして地上に極上の環境をつくり出してきたのだ。そしてこれを人類の住み処として提供し、世にも珍しい知的生物人類を育んできたのだ。それなのに、こともあろうに、その知的生物である人類が自分の生存生活の場である環境を台無しにしてしまっているのに、人類はいまもって省みようとしないのはなぜなのか。

人類はすつかり汚染した地球をどう思っているのか。自分の住み処である地球をこんな汚染してしまっても、まだ足りないというのか。それとも目の前の欲に駆られて、すつかり目が眩んでしまったのだろうか。

とにかく、地球環境の悪化の度は、年々加速してきているのだ。それなのに、これでも足りず、さらに地球環境を悪化させ

ようとしているのはどういうことか。これが現代科学技術の進歩と言えるのか。自分の活動の場である地球を破壊することが科学技術の進歩だと思っているのか。

「黒」との関わりのある化学の分野を例に見てみよう。

たとえば、化学工業によって生産される各種の合成化学物質は、これらを原材料として各種樹脂、接着剤、化学肥料、農薬や殺虫剤、医薬品、食品添加剤、洗剤など、工業製品や家庭用品などに加工され、大量生産大量消費大量廃棄システムに乗って、地球環境のいたるところで、まるでばら撒くように、大量に浪費され、大量に捨てられている。これらの合成化学物質には有害なものも数多く含まれているが、これらは最終的に地球環境、ことに海洋に集中し、分解されないものは年々集積していくことになる。

その結果、海洋はさまざまな化学物質によって汚染され、そこに棲息する海洋生物は程度の差こそあれすでにすべて汚染されてしまっているのだ。

いちいち例を挙げればきりが無い。毎日食用に供している魚介類で合成化学物質によって汚染されていないものはないといつてよい。

とにかく、地球がつくり上げてきた極上の環境がすつかり汚染され破壊されてしまっているのだ。これらはすべて人類誕生後の出来事であり、人間の行為によるものなのだ。人間自ら自分の住み処を台無しにしているのだ。それはまるで自ら天に向かつて唾を吐いているようなものだ。

人間は毎日せつせと汚れた空気を吸い、さまざまな化学物質に汚染された水を飲み、化学物質や放射性物質に汚染された農作物や海産物を食し、化学物質をたっぷり添加された食品を食べつづけているというわけだ。

そしてこのような地球環境にしてしまったのは、現代に生きる人間が善かれと思いい、営々と築き上げてきた現代科学技術文明そのものなのだ。現代科学技術文明を駆使する人間自らそうしてきたのだ。

端的に言って、これは現代科学技術文明による進歩というより、逆の後戻り現象というべきものであり、人間の退化そのものではないのか。

現代科学技術は自然システムのメカニズムの解明とその真似事を通して発展し、人間や動植物の機能を機械に置き換えたり、もろもろの化学物質を合成してきた。これも生活を改善し、安楽を手に入れ、毎日をエンジョイするためのものだろう。

それではなぜ地球環境の悪化を放置しておくのか。そこまで現代科学技術が進んでいないのだと言われればそれまでだが、自分たちの住み処だろうに……。

こうなるのも、人間の行為によるものだが、それをもたらすのは、現代科学技術に内在する原因に基づくのか、それとも利益しか眼中にない経済や資本のなせる業なのか。そうではなくて、地球人類そのものの欠陥なのだろうか。

とにかく、現代科学技術の進む方向が逆のように思えてしかたがないのだ。種としての人間を退化させる方向が現代科学技

術文明の進むべき方向だというのだろうか。

化学物質を例にとれば、現代の化学合成技術ではほぼどんな化学物質をも合成できるにちがいない。各種の合成樹脂など、自然界にない物質をもつくり出してきているのだ。

希少な物質を大量に合成できれば、大儲けすることも、人びとの生活を豊かにすることもできるかもしれない。かといって、そこには限度というものがあるだろう。だが最近の地球の人間は大量生産大量消費大量廃棄するために限度を超えて限りなく化学物質を合成しているようにみえるのだ。

もう一度言おう。現代の化学合成技術は、「黒」の連中から聞かなくてもなく、ほぼどんな化学物質をも合成できるので、もかかわらず、それでもさらにその先を求めて歩んでいる。そしてさらに地球環境を悪化しようとしているのだ。

そのなかのひとつをあげれば、たとえば、いま進められているナノ素材（物質）の開発はどうだ。細胞より小さい、一〇億分の一メートルスケールの極めて微細な物質をつくり出して利用しようとしている。化学物質を原子スケール、分子スケールで活用しようというわけだ。

これまでの「マクロの世界」から「ミクロの世界」へ手を広げようとしているわけだが、この間には、全く次元の異なる質的な違いがある。なぜなら、原子分子スケールの微細なミクロ粒子であるナノ素材（物質）には、従来の物質（マクロもの）とちがひ、極めて特異な特徴があるからだ。

それはまず、サイズが極めて小さい。このため、質量当りの

表面積が極めて大きくなる。それにサイズがナノスケールになると、成分が既存物質と同じでも、異なる特性を示すようになる。「量子サイズ効果」で電子特性が変化するなど、物理的・化学的特性が大きく変わるといふのだ。

このような変化でミクロの化学物質がさらにアクティブになり、さまざまな分野で一層効果的に活用できると考えているらしい。だが本当にそうなのか。

人体の細胞よりも遥かに小さい原子スケール分子スケールの活性の強い化学物質が、細胞膜を通り抜ける。血液や脳の関門も通過する。こうして遺伝子機能を攪乱したり、幼児の脳を損傷するおそれすら考えられるのだ。

ナノスケールの化学物質に対しては、人体の有する防御機能は役に立たないのだ。人体には異物に対するさまざまな防御機構があるが、ナノスケールのミクロ級の異物は想定外で、この種の物質には全く無防備なのである。

とにかく、ナノスケールの化学物質が体内に入ると、簡単に細胞に入り込み、DNAや細胞小器官に直接作用するというわけだ。こうなれば、これまでの間接的な作用とは、比べようもないほど直接かつ効果的に作用することになる。

となれば、まず、医薬の分野や化粧品などへの応用が図られ、そして瞬く間のうちに、その他の分野へと広がっていくことだろう。いや、もうすでに市販のさまざまな商品に用いられ、多くの人が利用しているようだ。人間を含め、生物生態系にどんな悪影響があるかもチェックされることなく、商業ベースで利

用され出しているのだ。

こうして活性の強いナノ素材は大量生産大量消費大量廃棄べルトに乗って、他の合成化学物質と同様に、環境へ垂れ流され、既存の物質を凌駕して激的な影響を及ぼし、環境を大規模に汚染していくことになるにちがいない。その揚げ句の果ては、言わずと知れた地球規模に広がる取り返しの効かない環境汚染だ。特異な特性をもつナノ素材のことだ。極めて少量でも甚大な地球環境汚染となり、人間はもちろん、生物生態系は分断され、多くの生物種は絶滅するにちがいない。

もう一度、繰り返ししておく。

活性の強いナノ素材が細胞膜を簡単に通り抜けるのだ。そしてDNAに入り込み、遺伝子情報を変えることもいとも簡単なのだ。そして各種の生物種の遺伝子を変異させ、絶滅へ追いやることになるだろう。人類も決してその例外ではないのだ。

「終わりの始まりか……」

彼は思わず、声を出す。

ナノ素材の影響は生物の遺伝子の変異や破壊だけなのか。いや、その程度のことでは収まるまい。

この問題にはさらに次元の異なるもつと根源的なことが控えているように思えて仕方がないのだ。

彼は空を見上げる。空は宇宙の無限の彼方へ広がっているように見える。

この宇宙はいまもって広がりつつある。百数十億年前、大爆発（ビッグバン）して以来、この宇宙は広がりつつけているの

だ。その大爆発によってあらゆるものが細かく粉碎されて飛び散った。電子、陽子など無数の素粒子がそれだ。それらの素粒子が時間とともに集まって物質となり、物質が集まって物体すなわち星を形成していったのだ。

こうして地球が形成され、そしてさらに長い時間を経て、生物生態系が形成され、人類が誕生した。

大爆発後、長い長い時間を経て、漸く、地球が形成されたのだ。それがどうだ。折角形成された物体を人間が細かくそしてますます細かく碎き、超極微のナノ素材を大量につくり出そうとしている。ナノテクノロジーはさらに分子デザインをもめざしているのだ。これはなにを意味するか。

ナノ素材には、既存の物質にない特異な特性を持つ。激しい活性をもつ。これによって、人間のコントロールを超えたところで、独自に新たな物質の合成や極小サイズの合成機械（ロボット）が形成され、それを基に、新たな生命体や別の世界が創り出されるかもしれないのだ。

もしかしたら、それは人間と相容れない世界かもしれない。それとも人間を支配する物体かもしれない。人間はその先を考えているのか。

さあ、どうする。どうすればいいのだ。人間のつくり出した現代科学技術文明をすべてご破算にして、新しい世界を造るのか。だが現代科学技術文明下で現代科学技術文明をリセットしても、結局、元に戻るだけだろう。

彼はふと、「黒」の議長もこのことに気付いているような気がした。

6

突然、激しいノックにつづき、ドアが内側に静かに開く。

代表は反射的に顔を上げる。そして執務機の椅子に座ったまま、開いたドアに目を向ける。だがいくら待っても、誰も現れない。ドアは開かれたままだ。

「誰だ……、そのいるのは……」

返事がない。彼は仕方なく椅子から立ち上がり、ドアへ近づいていく。内開きのドアが音もなく閉じて半開きになった。

彼はドアが動き出したことに気付き、足を止める。ドアは静止して、ふたたび動くことはなかった。

彼は急いで踵を返し、執務机に戻ると、引き出しから拳銃を取り出す。そしてふたたびドアへ向かう。いつの間にか、ドアは閉じてあった。

静かに、ドアのノブを回した。そして拳銃を構え、彼は勢いよくドアを引く。ドアの陰には誰もいなかった。

ドアを開けたまま、そつと廊下を覗く。廊下にも人影がない。彼は拳銃をポケットに仕舞うと、執務室横の専用の洗面所へ向かう。鏡に生気のない萎れたような顔があった。彼は鏡に映った顔が自分のものとは思えず、じつと見つめる。

やはり自分の顔だった。だが自分のものと分かるまでかなり

の時間を要した。

彼は水を勢いよく出して顔を洗う。濡れた顔をペーパータオルでごしごしと拭いた。それから小用をたし、執務室へ引返す。

開放したままにしていた執務室のドアがいつの間にか閉ざされていく。不吉な予感が襲う。彼はしばらくドアのまえに佇んでいた。それから、徐にノブを回した。

ドアのすき間から、執務机が見えた。

彼はドアをさらに押しながら、一步、室内へ踏み込む。ひとりの痩せぎすの男が執務机の椅子に腰を下ろし、引き出しの中を覗いている。

「誰だ、貴様は……」

「……………」

男が黙って、ひょいと顔を上げる。

「あ……」

見覚えある顔だ。彼は一步前を出て、机に近づき、男の顔をまじまじと見る。一体、誰だ。彼は目まぐるしく脳を回転させる。だが空回りしているのか、思い出すことができない。

「これはなにかね」

男は引き出しから一枚の写真を取り出し、手に持ってかざす。

山城から取り上げた女の写真だった。

「それは……」

不意に、黒の尖り帽子が浮かんだ。

「……………」

男は口を噤んだまま、鋭い目でつぎを促す。

「それは……」

黒の尖り帽子が一見柔和そうに見える顔と重なり、帽子を被った男が現れる。執務机の男だ。

「あ、議長……。いつ、お見えでしたか」

全身からどつと汗が噴き出した。

「うん。それで……」

議長の目が光る。訊いていることに応えるのだ。

「あ、はい……。実は、写真は部下が撮ったもので……」

「部下？」

「はい。山城という者が……」

「どこで撮ったのだ」

「あの……、その者を呼びましょうか」

「あとでいい。ところで、スクリーンは使えるか……」

議長は写真を上着の内ポケットに仕舞ながら、言う。

「右側、いや、議長の左側の壁がそうです」

彼は身中に入った得体のしれない男のアドバイスを思い起きます。その男は「不必要に動くな、無闇に抵抗するな、余計なことを口走るな」と言い、そして命が惜しければこれら三つを厳守せよと指示したのだ。

「それで……」

「端末は机の左端にあります」

代表の声と同時に、議長の指が端末に触れた。スクリーンに画面が浮かぶ。まず二人の女が、中年女と老女の二人だ。しば

らく間を置いて、二人の男がつづいて現れた。身体の大きいのと幾分背の低い二人の中年男だ。

「若いほうの女が当人で、となりがその母親です。それと大きい男が例の事件の被害者の産廃処理業者で、背の低いほうが女の連れということですが……」

スクリーンのスピーカーから低い声が流れる。

議長は端末を手に取り、女たちの画面に変え、ズームアップする。そして写真と見比べながら、厳しい表情でしばらく女たちを見ていた。

「もういい。あとで連絡する。四人はそのまま留めて置くように」

言い終わると、議長は直ぐスクリーンの電源を切り、彼に顔を向ける。

かなり距離を置いて、議長のまえに立ち、時折横目でスクリーンを盗み見していた代表の顔に緊張が走る。

「きみ、椅子をここに持つてきて座りなさい」

議長は執務机のまえの空間を指差す。彼は指示に従い、椅子を運ぶ。議長は椅子に背を押してゆつたり座ったまま、じつと彼の動きを見ている。顔からスクリーンを見ていたときの厳しさが消えていた。

「いつお見えでしたか。気がつきませんでした、失礼致しました」

彼は椅子を執務机に近づけ、会釈して座る。議長の近くにおれば、起爆装置を作動させられることはあるまい。この距離で爆薬が破裂すれば、議長自ら巻き添えになるだろうからコント

ローラーに触れようとすることはないだろう。

「ああ……、突然だったが、変わったことはないかね」

いつもと違い、鷹揚な口調だ。

「はい、とくにございませませんが、今回はどんな……」

つい釣られて口を滑らしてしまう。

「うむ……」

議長の目が一瞬きらりと光る。

「……」

汗が噴き、一筋の汗が背筋を流れた。彼は議長がどんな目的で来訪したのか、どうしても知りたかった。それを知らなければ、どう対応してよいのか分からないのだ。それにいつどのようにしてここにやってきたのか。もしかしたら、この地区本部のなかに議長の手先がいるのではないか。

「そろそろ引退しようと考えている。それであとを託せる者と引退後の住み処を探しているのだよ。きみのところに適当な候補者は見当たらないかね」

「とんでもない。議長に引退されては困ります。まだまだ続けて頂かないと……」

心にもないことを言いながら、彼は別のことを考えていた。だが一体誰だ、議長をここに案内してきたのは。山城と特別秘書の顔が浮かんだ。

「そうかね。皆がそう言うがね……」

議長はにやりとする。だが直ぐ厳しい顔になる。

「ところで、Kキャンプに宿泊施設があるそうだな。見せても

らおうかな。場合によって、しばらく使わせてもらうことになるかもしれないが、いいかな」

議長は返事も待たず、直ぐにも出かけるかのように椅子から腰を浮かした。代表も釣られるように、身体を動かす。

7

「チーフ、議長が見えているらしい」

特別秘書がブースに駆け込んできた。

「えっ……」

山城は思わず、執務机から立ち上がる。

「実は……」

特別秘書が声をひそめる。山城から代表の様子を聞いて、自分の目で代表の状態を確かめようと執務室を訪れたという。そのとき、なかから聞きなれない声があったというのだ。

「それで……」

「後継者を探しているとか……」

「議長がそう言ったのか。聞き違いじゃないのか」

じつと、特別秘書の目を覗く。たとえ地区代表だとしても、面と向かつて、議長が自ら後継者を探していると話すだろうか。もしかしたら、この男は俺を担いでいるのかもしれない。大体、ドア越しの声だけで、どうして議長だと分かるのだ。

「Kキャンプを使用したいとか……」

彼の目に疑念を見て取ったのか、特別秘書はさらに耳にしたことを言う。

「なんだと、議長がそんなことを……、それで、代表は……」

代表が議長に逆らえるはずがないのに、彼は敢えて尋ねる。

「議長が立ち上がるような音がしたので、多分……」

特別秘書は曖昧に応える。

「おい、代表のところに行ってみよう。このままKキャンプへ行かれてはまずい……、なんの準備もしていないし……」

山城は独断できざまな物資を隠匿していることを思い浮かべながら、なんとか阻止しようと駆け出す。特別秘書がつづく。

8

山城は執務ブースを飛び出すと、代表の執務室へ急ぐ。廊下を走り、階段を二段づつ駆け上がっていく。

「(ケン、慌てるな。特別秘書には気を付ける。やつは、もしかしたら、議長の手先かもしれないぞ)」

一体同化している耀が山城の耳元で大声で叫ぶ。

彼は山城をなんとんでも思い止めさせたかった。特別秘書との遣り取りを聞いていた彼には、山城が完全に騙されているようにしか思えないのである。大体、ドア越しに立ち聞きしているのに、あんなに詳しくかつ正確に把握できるはずがない。

彼には地区本部ビルで議長を手引きしているのは特別秘書に

ちがいないと思えて仕方がなかった。

「うるさい。お前は黙っている。議長と代表が一緒だ。まさに、千載一遇のチャンスじゃないか、二人を同時にやつつける……」

「（いまが議長と代表を同時にやつつけるチャンスだというのか。そんなに簡単ではないぞ。ワナが仕掛けてあるかもしれない。飛び込んだじゃだめだ。特別秘書を先にやれ。いいな。さもないと……）」

彼は山城の心臓に手を伸ばす。

「うるさいヤツだ」

階段を上りきったところで、突然山城が躓き、身体が宙を舞った。空中で回転して落ちる。その拍子に、右足の向う脛を最上段の階段の端でしたたか打った。

「痛てい……、こいつ、やりあがったな」

大声で大きさに悲鳴を上げる。

「大丈夫ですか」

後ろにつづいていた特別秘書だ。折り重なるように倒れ込むのを手をつき、なんとか凌いだらしい。

「先に行くんだ。二人を外へ出すな」

特別秘書の背を押す。山城は向う脛を押さえ、足の痛みに耐えて立ち上がると、痛む右足を引きずりながら、特別秘書の後を追っていく。

代表の執務室は長い廊下を曲がった奥まったところにあつた。廊下から執務室のドアは見えない。山城はびよこんぴよこんと

跛を引きながら急ぐ。

「あつ……」

ようやく執務室が見えるところまできた。ドアが半開きのままだ。

特別秘書が急いでドアを開けたまま飛び込んだのだろうか。それとも議長と代表がドアを開けたまま出ていったのか。

彼はドアに近づき、室内を覗く。それから開いたままのドアを少し押ししてみた。ドアはスムーズに押されるまま動く。

山城は一步室内へ入る。周りを見渡す。どこにも人影はなかった。議長らしき人物もいなければ、代表の姿もなかった。特別秘書はどこへ行ったのか。

「（ヨウ、特別秘書もいない。どこへ行ったんだ。探してくれ）」
山城は急いで、室外へ出る。そして長い廊下を覗く。そこにも人影はなかった。

「（おい、どこへ行くんだ。執務室に秘密の通路があるんじゃないのか、屋上のヘリポートに通じる……）」

「（分かった。ヘリだ）」
山城は踵を返すと、廊下を走り抜け、屋上への階段を駆け登る。

屋上へのドアを開けると、ヘリポートで二機のヘリコプターがプロペラを全回転している。ヘリコプターはいまにも飛び立とうとしていた。

山城は近くのヘリをめがけてダッシュする。だがその前にヘリは舞い上がる。山城は向きを変え、隣のポートのヘリをめが

けて突進する。

二機目のヘリコプターも相次いで舞い上がり、西の方へ飛んでいった。

9

「只今、戻りました」

「あ、ハクリか」

アムンが執務机から顔を上げる。そして椅子から立ち上がり、と、ハクリを横のソファに招く。

「そうだ。ミサを呼ぼう」

「彼女も戻っているのですか」

「そうだよ……」

彼はハクリの報告を聞くまえに、ミサから受けた報告を最初からはじめる。

まず、木実子とその連れと実家に戻っているところを大男に襲われて火を付けられたこと、そして実家が二階の一部を残して殆ど焼けたこと、大男を含め、木実子たちが「黒」らしき集団に拉致され、監禁されているというのだ。

「そうですね。ところで、ヨウに会ってもう一度戻るように説得したのですが、ダメでした。それで……」

ハクリもつられて、繰り返す。

「まあ、ハクリ……」

急いで来たのか、ミサが息を弾ませ、ハクリの横に座る。

ハクリはヨウと話し合つて、代表と一体同化したこと、そして代表に体内に埋め込まれた爆薬とその起爆装置の主（コントローラー）が誰であるか吹き込んだことなど、すべてを報告する。

「それで代表が謀反を起こしてくれればいいが……」

彼はハクリとミサを交互に見る。

「狙いはそういうことです。そして相打ちになればいいのですが、そううまくいくかどうか……」

「ハクリ、きつとうまくいくわよ。そこを山城（耀）が突けばいいのね」

「うん、計画通りいけばいいが……」

「いくわよ。それで耀ちゃんの『オセロ作戦』が終結するのね」

未佐は同意を求めるように、黙つてふたりの遣り取りを見ているアムンに目を向ける。だが彼は黙つたままだ。

「それで『黒』が壊滅することになつても、地球の状態はあまり変化しないかもしれないよ。もしかしたら、地球環境はもっと悪化することになるかもしれない」

しばらくして、彼がようやく口を開く。そして呟くように言う。

「まあ、そんなことは絶対にありません。地球環境は……」

未佐が叫ぶ。
「わたしは地球人たちが自ら自発的に地球環境を守ろうとすることを期待して、そのお手伝いしようと思つていた。だがそ

それは甘い考えだったようだ。地球人たちは『黒』がつくり出すさまざまな合成化学物質にすっかり身も心も奪われてしまっている。だからもし、私が地球環境を損ねるからといって、彼らから合成化学物質を奪えば、彼らは必死になってこれを取り戻そうとするにちがいない……」

「そんなことは考えられません、アムン」

「そうだね。ミサが思っているように、私もそう思いたい。高等生物であり、知的生命体である地球人だ。だがね、地球環境を台無しにし、自らの健康を害し、次世代へも悪影響をおよぼすおそれのある合成化学物質を、たとえ、便利で安価で手っ取り早く使えるからといって、こうも大量に使い出すことはないと思うのだ。地球人たちは次々に開発され、商品化されて大量生産される合成化学物質製品を平気で大量消費し、環境へ大量廃棄していく。全く信じられないことだ。たとえ、これが『黒』の連中が巧妙に仕組んだワナによるものか、それともCMに踊らされてのこととしても……」

「……………」

「とにかく、『黒』だけのせいにはしないで、地球人自らが地球環境を守ろうとしなければ、いずれ地球環境を台無しにしてしまい、地球は地球人の生存すら拒否するにちがいない。そのときになって、助けてくれと泣きついてきても、もう手遅れになってしまっているだろう。いや、もう手遅れかもしれないのだ」

「まあ、耀ちゃんが孤軍奮闘しているというのに、アムンたら……………」

未佐がヒステリックに叫ぶ。

「ミサ、アムンはヨウの活動が無駄だと言っているのではない。地球人も地球環境を守ることを自分の問題として自らの行為や行動に責任をもつべきだと言っているのだよ。そうしなければ、まるで『策で水を汲む』ようなものだからね」

ハクリは未佐のそばによって、しきりに慰める。

「分かっているわ。アムンが急に態度を変えたようなことを言い出すから、耀が可哀想に思えて……。でもアムン、なぜなの、急に……」

彼は口を閉ざしたまま、じつと未佐を見つめている。もう口を開くことがないだろうと思われた。だがハクリも未佐もソファから立ち上がろうとせず、彼が口を開くのを待っている。

沈黙はしばらくつづいた。いつの間にか、彼の目が潤み、うっすらと涙が浮かんだように見える。口が動いた。

「薄々感じていたことだが、『黒』らの錬金術は限界を超えた領域に入ってしまったようだ。今回の議長の来訪は……」

彼は一瞬、声を詰まらせる。言うべきか言わざるべきか。彼は迷う。それから大きく息を吐くと、口を開く。

「それは多分……」

しばらく間をおいて、彼は「議長来訪の目的は『勝利宣言』するためだ」と言い、おおよそつぎのような話をした。

これまで「黒の集団」は金やさまざまな利権をちらつかせ、積極的に行政と癒着したり、政治家におもねりたりして、時の権力（政治家や官僚など）に働きかけ、勢力拡張につとめてき

た。それは自分たちが大金を投じ折角開発したさまざまな合成化学物質の不都合や欠陥を見逃してもらい、これを大量生産大量消費大量廃棄システムの乗せてスムーズに捌くためのものだった。

だが有害な化学物質による公害や環境汚染に対する住民からのクレームが高まり、政治や行政もこれを放置しておくことができず、さまざまな規制がはじまった。かといって、その多くは事後的なものだった。だがこれでは公害や環境汚染を解消できない。そこで登場するのが、事前的規制であり、そのツールとして考えられたのが環境アセスメントやテクノロジアアセスメントの制度化だった。

これに対して、「黒の集団」は自分たちの活動が制限されるとして、これらの規制に陰に陽に反対運動をつづけてきたのだ。

日本の行政は企業行動を縛るような法制を立案したり、規制の制度化に当たっては、当事者の意見を聴く。ことに、業界の意見は蔑ろにしない。というより、業界の意見を尊重するのがしきたりだった。「黒の集団」は業界の意向を受け、このような機会に、あらゆる手を使い、猛然と反対運動を行ってきたのだ。いちいち例を挙げないが、これが効果を発揮し、規制の手遅れになったり、規制そのものが見送られて、影響や被害が拡大した例が少なからず見受けられる。

それでも、たとえ事後的であっても、当該化学物質と影響や被害発生との間に因果関係を証明できれば責任追及が可能だった。だが「黒の集団」の錬金術が「限界を超えた領域」へ入っ

ていくことによつて、それが不可能になつてしまふのだ。これで「黒」の一方勝ちとなつてしまつたということだ。

彼は大きなため息をつく。

「どうしてそんなことになるのですか。悪いことは悪いのじゃないですか。悪いことをやっても責任を追及することができないなんて許されない」

未佐は我慢しきれなくなつて、大声を出す。

「厳密な因果律を前提としている現行システムでは責任追及が難しい。でも、もしそのようなシステムを全面的に変えられることができれば、責任追及することが可能になるだろう。と言うより、どのようなケースでも責任追及できるシステムを採用すればすむことだが、それには発想の大転換が必要だね。もつとも、いまの地球人にはそういうことは至難に近いことだろうけど……」

「発想の大転換が……」

「そうだね……」

そして彼はこんなことを言い出す。

地球上の生命体はすべて地球という器のなかの存在にすぎない。そこに生きるものは地球のもつ制約条件に支配されているということだ。だから、地球の生成と不可分の関係にあるといつていいだろう。

地球がどのようにして生成したのか。地球の生命体、ことに、知的生命体である地球人はこのことをつねに念頭においておかなければならない。さもなければ、自ら生命を絶つような行動

をとることもなかりかねないのだ。そしてそれは地球人類絶滅をもたらすことになるだろう。

「『限界を超えた領域』へ入ったということがそういうことなのですか」

未佐にはなんのことか分からない。だがなんとなくこんなことかと感じるのだ。

「この宇宙が生成されてからとてつも長い時間を経て、地球は太陽系の一惑星として姿を現した。それはビックバンではじまったこの宇宙が極めて長い時間を掛けて、つくりあげてきたものだった。宇宙の生成過程や他にも別の宇宙が存在するかなどについては、未だ、地球人は説明していないようだが、とにかくこうだ……」

彼はつづける。

地球が存在する宇宙が唯一の宇宙ではない。このほかにも別の宇宙（島宇宙または小宇宙）が無数存在する。そしてこれらの個々の島宇宙が集まって大宇宙（集合体）を形成しているのだ。

地球は大宇宙のなかのひとつの島宇宙に存在するひとつの星である。地球が存在するこの島宇宙は百数十億年前に大爆発（ビックバン）を起こし、いまなお膨張しつつあるが、いずれ膨張が止まり、拡大から縮小に転じることだろう。こんどは宇宙空間が限りなく押し潰されていくのだ。そしてこれ以上押し潰れない極限に達すれば、ふたたび大爆発を起こして膨張し、島宇宙空間は拡大へ転じることだろう。

これが島宇宙それぞれのダイナミクスである。大爆発の際に生成された無数の量子（電子、中性子、陽子、光子、クォークなど）が宇宙空間に飛び散るが、これらは決まった行動をとらず、それぞれが揺れ動いている。そして量子同士が衝突して反発したり、あるいは結合して、さまざまな原子ができ、さまざまな分子が生成された。そして新たな物質が生み出されていく。こうして生み出された物質は互いに引き合って、集合集積して大きな物体へとなっていく。

この辺の詳しいメカニズムは省略するが、大爆発後飛び散ったさまざまな極微細な量子（電子、陽子、中性子など）が衝突を繰り返して、互いに付いたり離れたりしながらさまざまな物質がつくり出されたのだ。そして無数の星が生まれたということだ。地球もそのひとつなのだ。

「いいかね、ここが問題なのだ。ビックバン直後の宇宙の混沌とした宇宙空間はまさに『ミクロ（量子）の世界』で、ミクロ（量子）独自の原理が支配していた。だが時間の流れのなかで、いくつかの量子が結合して原子や分子となり、それが結合して安定した複雑な物質が生成されるようになると、それらの物質には『マクロの世界』独自の原理が支配するようになる。その転換は動物の生態に見られる『変態』のようなものだがね……」

「『変態』……。蝶がサナギから羽根をもった成体に生まれ変わる……」

「そのとおり。実際、宇宙における地球の生成に見られる『ミクロ（量子）の世界』から『マクロ（物質）の世界』への転換

は、まさに『変態』のようなものだった。それは確率論から決りを見て、幾分口元を歪め、にやりとする。

定論へ、偶然から必然、予測不能から予測可能といった世界への転換だったのだ。まあ、多少不正確な比喩だが、大体、おおまかにはこんな具合だったと考えていいね」

彼は不可解そうな表情を浮かべている未佐を見て、いろいろ言葉を変えて説明する。

「それが『限界を超えた領域』に入ってしまったために、また『変態』が……」

「そのとおり。『黒の集団』は『マクロの世界』だけでは飽き足らず、『ミクロの世界』まで手を伸ばし、そこへ入り込んで支配しようとしているんだよ」

「よく分からないけど、『ミクロの世界』では環境汚染や人体への影響が生じて、原因追及が難しくなるというわけですか……」

「そうだね。これまでの因果律が成り立たない世界でもあるので、それが不可能になることもあるだろうね」

「でも、アムン。それは『黒の集団』にとっても極めて危険なことではないですか。『黒の集団』を含め、地球人類全体が危険に曝されることになるのでは……」

ハクリが口を挟む。

「そうだね。そういう意味では、『勝利宣言』とは言えないな。もしかしたら、議長の訪日の意図は、別のところにあるのかもしれないね」

彼はいままで話してきたことを忘れてしまったように、ハク

第二章

10

「例の男から話を聞きたい。繋いでくれ」

議長は壁一面に設置したスクリーンを指差し、近くにいる黒スーツの男に指示する。周りには常時数人の男たちが控えている。議長秘書団の構成メンバーであり、ボディガードでもあった。そのなかに見慣れた薄っぺらい顔があつた。代表の特別秘書だ。

スクリーンに大男が現れた。

彼は代表らとともに地区本部ビル屋上からヘリでKキャンパスに移動し、宿泊施設の全室を独占していた。一室が議長の執務室となり、その隣室にはさまざまな情報機器や設備が持ち込まれ、すでに高性能の情報処理システムが設置されていたのだ。

「尋問を始めなさい」

大男のいる室内が映し出された。ホテルの一室か。室内の片隅にベッドが見える。尋問役の男と大男が応接セットの小さなテーブルを挟んで向かい合っている。

カメラはどこだ。両者の面前に置かれたパソコンのカメラか。

大男は両肘掛けの椅子で窮屈そうにもぞもぞと身体を動かす。だが尋問役の男はイヤホンから流れてくる議長の指示に気を取られているらしく、全然大男に目を向けようとしな

突然、スクリーンのスピーカーから声が洩れてきた。尋問がはじまったのだ。

「なぜ、あの女たちを殺そうとしたのだ」

「ここはどこだ。お前たちは何者だ。おれをどうしようと言うのだ」

「質問はしないで、聞かれたことにだけに答えなさい。さもないと、警察に引き渡すことになる。さあ、答えるのだ」

大男は尋問役の男をじつと睨み付けて、口を開こうとしない。彼は薄っぺらい顔の男に目を向ける。

「大男は女に自分が経営する産廃処理場の焼却炉を爆破されたので、その仕返しをしようとしているようです」

「焼却炉が……。それで殺そうというのか」

「大男が経営していた一〇〇を超える産廃処理場の焼却炉すべてが爆破されたというのです」

「ほう、一〇〇もか……。女が一人でか」

「連れの男がいます」

「二人でやつたのか」

「いいえ。あの件には、一寸、判然としないところがありました……、なにしろ、ごく短い時間に一〇〇を超える焼却炉がつぎつぎに爆破されたのです。彼らに手助けをしたものがあるのではないかと疑い、二人の居場所を突き止め、しばらく監視していたのですが、それらしいものも現れず、監視活動を打ち切つてしまったのです」

脳裏にやつれた女の顔が浮かんだ。あの写真の女だ。

彼はしばらく考え込む。

代表の机の引き出しから取り出した「女の写真」は山城という男が撮ったものだと言っていたのだ。確かに、以前、二人を監視しているときに撮影して代表が送ってきた写真の女だ。だが顔付きがどことなくちがっているような気がする。背景も着ている服も別だった。なぜだ。山城が撮ったという写真はいつどこで撮影したのか。二人を監視していたときと違う日時か。それも違った場所か。

彼は薄っぺらな顔からスクリーンへ目を移す。大男はふて腐れた態度で、まだ口を開こうとしない。

「大規模のものではなく、一〇〇もの小規模の産廃処理場をつくったそうだが、なにか訳があるのかね。その一〇〇もの焼却炉を、誰かの手助けもなく、女が一人で、極めて短時間のうちに爆破できると思うかね」

彼はスクリーンに向かって男に直接話かける。不意にスピーカーから流れた声に、大男は一瞬狼狽え、声の主を探すかのよう目を泳がせる。

「小規模だったら野焼きもできるし、とにかく、そのほうが行政の規制逃れに都合なんだ。それが一度に全部がやられてしまった。女がひとりですべてやったかどうかは分からない。連れの男のほかに、手助けしたものがいるにちがいない。女には誰か強力な助っ人がいたんだ。女がいたからそうだったんだ。折角築いたものをあさされちゃ、我慢ができない。女には死んでもらうほかないのだ」

大男は自分に言い聞かせるように言う。

彼は薄っぺらな顔に合図する。大男に代わって、スクリーンに女が映し出される。

尋問がはじまる。

「なぜ、産廃処理場の焼却炉を爆破しようとしたのか」
「……………」

女は尋問役の男を無視し、そっぽうを向いたままだ。

「なぜだ。焼却炉を爆破してもどうにもなるまい。あの大男に恨みでもあったのか」

「大男？ あんな男知らないわ。一面識もないわ」

「じゃ、なぜ、あんな男の焼却炉を爆破したのか」

「あんな男……、別に、あの男とは関係ない。焼却炉の短い煙突からモクモクと吐き出される黒い煙の悪臭が堪らないからよ。夜陰に乗じて野焼きを繰り返し、悪臭とダイオキシンなどの有害物質をばらまいているからよ。こんなこと許される？」

「ダイオキシン？」

「そお……………」

「それで一〇〇もの焼却炉をつぎつぎに爆破していった……………」

「まさか、わたしが手をかけたのはせいぜい数カ所だわ」

「でも、あの附近で一〇〇を超える焼却炉が爆破されている」

「知らないわ……………」

「誰かがやった。それは誰だ……………」

尋問役の男はときどき耳に手をやって、頭を傾げる。指示が欲しいのだ。だが彼は口を閉ざしたまま、じつと目を据え、ス

クリーンの女を見ている。

彼の脳裏に沸々と水辺に佇むひとりの若い女の姿が浮かぶ。スクリーンの女に似ているようでもあり、また別人のようにも見える。彼はもう一度スクリーンに焦点を合わせ、じつと見る。

やはり別人だった。

「一緒にいるひとは……」

思わず声が出た。

スクリーンの女が驚いた表情で目を上げて、いままでと違った声のする方向を見る。つぎの瞬間、スクリーンから女が消え、カメラが女から離れて控えていた年配の女をズームアップして捉えていた。

「あなたは……」

女の尋問役が年配の女に目を向けながら、尋ねる。

「……………」

年配の女は突然問い掛けた尋問役に目を向けるが、口を閉ざしたままだ。

「わたしの母です」

女が代わって、いささかむつとしたような声で応える。

彼は黙ってスクリーンに大寫しになった年配の女をじつと見ている。一瞬、彼の顔が僅かに歪んだようだった。

しばらくすると、議長は何事もなかったように、立ち上がり、スクリーンの前から離れた。

11

「(多分、Kキャンプだろう)」

山城が飛び立ったヘリコプターを目で追いながら、呟く。

「(うん。そうかも)」

耀は山城が追いかけてようとしているのではないかと思った。

だがヘリポートにはヘリが残っていない。

「(車で後を追いかけるんだ)」

山城はエレベーターをめざして走り出す。

「(おい、おい。落ち着くん。やつらを追いかけて、どうしようというんだ)」

「(お前は黙っている)」

「(一度、執務室に戻って、考えるんだ。いま、追いかけて行ったら、やつらの術中にはまるだけだ)」

山城は猛り狂っている。「引き止める」と命じたのに、特別秘書が従わず、議長と代表について一緒に行ったことを怒っているのだ。とにかく、落ち着かせなければならぬ。彼は山城の心臓に手をかけた。

「(おい、やめろ……)」

「(執務室へ行くんだ)」

「……………」

「(おい、分かってんのか)」

彼はさらに力を込める。

「(うーん……)」

山城は悲鳴をあげる。一步も動けず、その場にしゃがみ込む。

「(分かったな。執務室へ行くんだ)」

彼は心持ち手を弛める。

「(分かったから、早く手を放せ)」

山城は立ち上がると、しぶしぶ階段を下りる。そして廊下を抜け、ドアを押し、執務室へ入っていく。

「(いいか……)」

山城が執務机に付くのを待つて、彼は話を始める。

「(なんだ)」

「(やつらはお前を誘き出そうとするにちがいない。多分、代表がもうすぐ電話してくるだろう。それに応じて、Kキャンプへ行くようなことはしてはならない。用事があるなら、そちらがこつちに来るように仕向けるのだ……)」

「(なぜだ)」

「(お前は本拠地だと思っているかもしれないが、Kキャンプはいまや議長のコントロール下にあるのだ。そんなところへお前一人で行つても、勝ち目は無い。少しは効果が期待できるのはいせいで自爆テロ程度だろうが、これでは元も子ない)」

彼はじつと様子を窺う。山城はKキャンプを思い浮かべ、議長と代表が一緒にいるまたとない機会と思つているちがいない。

「(それでもいいじゃないか。議長も代表もいなくなり、『黒』が壊滅してしまえば、お前らにとつてはなにも云うことはないだろう)」

「(お前まで居なくなつては困るのだ。これから『天』に戻つ

て、援軍を連れてくる。それまでここで待つているんだ。いいな)」

「……………」

山城はじつとして動かない。

「(いいな。約束だぞ。絶対ここから出ない。いいね)」

「(分かった。早く行け)」

急に、山城が態度を変え、追いつしにかかる。

「(うん……)」

彼はなんとなく不安を感じ、腰を据え、居座りつづける。

「(さあ、早く……)」

急にせつつき出す山城を訝りながら、彼は腰を上げる。それから徐に山城から抜け出たが、彼はしばらくそこに留まり山城の様子を窺っていた。

12

「あの男の小規模産廃処理場建設計画に資金を出したのは誰かね」

議長は目の前に直立姿勢で立っている日本地区代表に目を向ける。

「はあ……」

代表は曖昧に返事する。どう応えるべきか、彼は議長のころのなかを読む。時間が欲しかった。

「なんのために、あんな細工をしたのか」

議長は彼に目を据える。心の裏側まで透視する視線だ。

「実は、欧米を中心に、環境ホルモンなど合成化学物質の影響についていろんな問題が噴き出っていて、合成化学物質に対する規制強化が計られていたのです。日本でもこれらについての対応に苦慮していたときでした。そんなとき、突然、ゴミ処理にともなうダイオキシシン発生問題が飛び出して、マスコミで大々的に取り上げ、社会問題となったのです。そこで、これに飛びついたということです」

彼は観念して、当時の様子を話す。

合成化学物質に対する規制強化に対する社会の関心を逸らすために、ダイオキシシン問題を最大限に利用する戦略にでたのだ。ことに、大気を汚染するダイオキシシンはゴミの焼却の際に生じる非意図的副生成物ということが、これを取り上げる決め手となった。ゴミを出している以上、たとえば猛毒のダイオキシシンであろうと、どうしてもその生成が避けられない非意図的副生成物なら、多少のことは我慢すべきだという論理だ。社会も多少大目に見るだろうことも予想される。

そこで産業廃棄物業者を悪者に仕立て、マスコミの追及をダイオキシシンを放出する産廃処理場の焼却炉に向けさせる作戦に出たのだ。そのために、ダイオキシシンを効率良く放出する小規模焼却炉を設置し、それと並行して、野焼きも大々的に行う小規模産廃処理場を数多くつくる必要があった。そこで大男に資金を提供して、首都圏を中心に、小規模産廃処理場をつ

ていった。

「そうやって規制の対象外となる一〇〇を超える小規模産廃処理場がつくられたということか」

「そこから毎日もくもくとダイオキシシンを含む黒煙が吐き出されるので、連日のようにテレビのワイド番組が取り上げ、マスコミや住民の目を釘付けにすることができて……」

この仕事は山城の進言を受け入れ、企画の段階からすべて山城に任せられたものだった。だが彼はこのことをおくびにも出さず、まるで自分の手柄かのように話しつづける。

「こうしてつくられた産廃処理場の焼却炉が目の敵にされて、相次いで爆破されたということか」

議長の鋼鉄の音が響く。

「はあ……、膨大な資金計画案を持って来たので、無謀すぎる」と判断し、かなり額を抑えたのですが、銀行からの融資も受けて、結果的に、一〇〇を超える産廃処理場が……」

雲行きが怪しい。彼は直ぐさま舵を切り替える。山城に責任を転嫁するのだ。

「うむ。で、計画案をつくったのは……」

「チーフの山城という男ですが……」

「あの女を監視していたグループの……」

「はい……」

「引き出しにあった例の写真を撮影したのもその男かね」

「その通りです」

彼は力強く言い切る。ここまできては引き返すことはできな

い。すべて山城が仕組んだことにするのだ。

「で……、そいつはいまどこにいるのか」

しばらく口を閉ざしていた議長が目が光った。

「地区本部ビルにいますか……。呼びましょうか」

「……………」

議長は口を閉ざしたまま、細く尖った鼻先をぴくぴく動かし
た。

13

「只今、戻りました」

「ヨウか……」

アムンは執務機の椅子でじつと目を据え、突然現れたヨウを
見つめる。

「実は……」

耀は用件を簡単に済ませ、一刻も早く山城のもとに戻りたかつ
た。山城はすぐ行動に移すタイプで、いつまでも待つことがで
きる男ではないのだ。焦ることを抑え、彼はアムンのもとに
直行し、すぐさまこれまでの出来事を掻摘んで報告する。

「そうか。それで……」

アムンには耀のこころのなかが見えているのだ。

「今が『黒』を壊滅させる千載一遇のチャンスです。議長と代
表がKキャンプと一緒にいるのです。山城一人じゃ心もとない

ので援軍が欲しいのです」

彼はアムンにこころのなかを読まれていることに気付かず、

一気に援軍を願ひ出る。

「ヨウだけでやることはできないのかね」

「それは……、できないとは思いますが、失敗は許さ
れないので、完璧を期したいのです」

「そんな弱気でどうする。ここは他のものを一切巻き込まずに、
議長と代表だけに照準を合わせ、一対一で戦うことだ。そうす
れば、ミサやハクリに手伝わしてもらうことも不要ではないかね。
オセロ作戦はヨウが立案したもの。最後までヨウが一人でやる
ことが重要じゃないのかね」

「……………」

彼にはアムンの言っていることが理解できなかった。議長と
代表の周りには、常時、大勢の護衛がいるではないか。

「それに、後継候補者を探しているということだが、それは議
長一流の奸智に長けた計略だろう。本心から後継者を探してい
るなら、そんな重要なことをわざわざ日本支部に来て公言する
とは思えないからね。彼は代表と山城の対立を知って、逆に、
これを利用してしようとしているだけのだろう。慌てて、Kキヤ
ンプに行けば、議長の思う壺にはまることだろうな。『黒の集
団』を壊滅したけりや、議長と代表の二人が一緒の時ではなく、
別々にいるときこそチャンスじゃないのかね」

「……………」

彼はじつとアムンの言葉を噛みしめる。一対一か。山城がK

キャンプに行きたがっていたが、彼はなんとなく不安を覚え、極力制止してきたことを思い浮かべる。

「そうだ。ヨウ、山城をKキャンプへやつてはならない。あそこはもはや山城の本拠地ではないのだ」

「分かりました。すぐ、そうします」

彼は身を翻す。

「ヨウ、ミサに会わなくてもいいのかな……」

アムンの声が入らないのか、唖れは天に舞い上がり、翔だしていく。

14

「山城か、こつちへ来てくれないか。議長が呼びなんだが……」

代表だった。電話のベルに反射的に取った受話器の奥から、いつもの代表の声とは違うかすれた声が響く。

「はい、山城ですが……。直ぐですか」

彼は代表の声がなぜいつもと違っているのか訝りながら、ゆっくり右手に受話器を持ち直し、一呼吸をする。

直ぐにもKキャンプへ行きたかった。だがいままで執務机で苛々しながら、耀の帰りを待っていたのだ。耀とはここから一歩も外へ出ないと約束したこともあって、たとえ代表から呼ばれたからといって、直ぐKキャンプへ出かけるわけにはいかな

い。

「そうだ。直ぐだ」

代表は言下に言った。いつもの声が変わっていた。

「でも足がないので……」

彼はなんとか、耀が戻るまで、時間を稼がなくてはと思う。

「足？ いまへりを回す。直ぐ来るんだ」

代表は不機嫌そうに言い、激しく受話器を置く音がした。

彼も受話器を叩きつける。

一瞬、代表によってへりに爆薬を仕掛けられ、危うく一命を奪われかけたことが思い出された。またその恐れなしとはいえない。彼は代表の業務命令を無視して、耀を待とうかと思った。そうだ。とにかく、耀を待つのだ。代表から電話があっても出なければいい。彼はじつと執務机に座りつづける。

窓からへりが近づいてくるのが見えた。ほどなくして、電話のベルがけたたましく鳴った。

彼は身動きもしない。ベルが鳴りつづける。彼は椅子の背にもたれ、目を閉じる。

不意に、執務室のドアが開く気配がした。彼は薄目を開け、ドアを窺う。

ドアが僅かに開き、すき間から目が覗く。

「誰だ、なにか用事か」

彼は思わず立ち上がり、身構える。ドアがさーっと開いた。薄っぺらな顔が現れた。

「いらしたのですか。留守かと思った。失礼しました」

代表の特別秘書だった。電話が通じないので、覗いたと言う。

「どうしたんだ。代表らと一緒にじゃないのか」

「お迎えにきたんですよ」

「なんだと……」

軽薄な男だ。調子が良すぎる。彼は特別秘書を睨む。彼を置き去りにして、ほいほいと議長と代表のあとに付いて行つたのに、こんどは迎えに来たというのか。

「後継者探しに来た議長が是非会いたいと言っているんだ。滅多にないチャンスだよ。この際、大いに売り込むんだね。さあ、行こう」

「俺はひとを待っているんだ。きみは先に行ってくれ」

「遅れば遅れるほど、不利になるよ」

「なにが不利になるんだ」

「山城チーフも候補の一人だと思えますよ……」

「なんの候補だ」

「後継者ですよ」

「まさか……」

「わたしが推薦しておきました」

特別秘書は薄っぺらな顔に卑屈な笑みを浮かべる。

「なんで、お前が俺を……」

やはり、この男は議長の手先だったのか。彼は耀が「特別秘書は信用できない男だ」と言っていたことを思い浮かべ、薄っぺらな顔をじつと見る。

「代表は後継者として不適格ですからね」

「なんでだ。代表が第一候補だろ」

彼はハクリが代表に仕掛けた企てを思い浮かべる。

「いや、あの男はダメですよ」

特別秘書はしゃあしゃあと言う。

「先に引き返してくれ。俺は後で行く。へりに爆薬が仕込まれているかもしれないからな。代表はうるさい二人を一度に仕留めようとしているかもしれないぞ」

「そんなことはありませんよ。乗ってきたへりが屋上で待機していますから、とにかく、ご同行願います」

「随分自信があるな。お前は、一体、何者だ」

「チーフの忠実なしもべですよ」

「なんだと。バカにするな。代表の特別秘書といいながら、一体、議長とはどういう関係なんだ」

彼にはこの薄っぺらな顔の男がどうにも信用できなかった。議長が送り込んできたスパイかもしれない。だから、彼がまえに試みた催眠術もこの男には効いていないにちがいないのだ。

「議長とはなにもないですよ。今回も代表の命令に従ってチーフのお迎えに参っているのです。わたしは代表の特別秘書ですから」

「だったら、なぜ、代表を後継者に推薦しないのだ」

「それは……」

「なんだ……」

「……」

薄っぺらな顔は口をもぐもぐさせ、声にならない声でしどろ

もどろ応える。

「大体、議長の後継者探しというのはペテンじゃないのか。普通なら、そんな重要なことは簡単に口外しないもんだ。後継者探しと称して探しだした候補者を事前に抹殺し、永遠の地位保全を企んでいるのでは……」

「それは考えすぎだ。議長がお呼びだ。さあ……」
 声を荒げる。

「用事はスクリーンでお願いしますと言っていたと伝えるんだな。俺は命が惜しいから、危険な乗り物には乗りたくないんだ。この前、ヘリで二度も、いや、三度だったが、爆薬を仕掛けられたことがあった。もう真つ平だからね。いいね。さあ、帰るんだ」

彼は特別秘書をビルの屋上へ連れ出し、ヘリポートで待機しているヘリに無理やり押し込む。そして操縦士に離陸を命じる。

プロペラが回転し出し、直ぐ舞い上がった。上空で二、三度胴体を揺らすと、水平飛行に移った。

彼はヘリポートから離れ、Kキャンプの方向をめざすヘリを見送る。ヘリの窓から薄べったらな顔が覗く。彼は右手を上げ、小刻みに左右に振る。

突然、これが特別秘書との最後の別れとなるような気がした。彼はヘリを追って屋上のヘンスまで走る。ヘリは爆音を残して姿を消していった。

15

「(ケン、無事だったか)」

耀は「黒」の日本地区本部ビル屋上のヘンスにしがみつくようにしている山城の姿を見付け、急いで降下し、山城の身体のかなかに潜り込んだところだった。

「(おい、お前か。いつ帰ってきたんだ)」

山城はヘンスから離れる。

「(一体、そこでなにしていたんだ)」

「(うん……)」

山城は生返事をしながら、歩き出す。

「(ヘリを待っていたのじゃないだろうな。途中で、ヘリが墜落していくのを見たが……)」

「(なんだと……)」

山城は口を開けたまま振り返ると、立ち止まって、ヘリが去った方向の空をじつと見上げる。

「(もしかして、ケンが一人でKキャンプへ行っていないか、ここへ来る前に一寸寄ってチェックしてきたのだ。その帰りの途中でヘリの墜落現場に遭遇したのだ。お前が乗っているのではないかと心配だったが……)」

彼は突然空中爆発して墜落していくヘリを思い浮かべる。

「(うむ……)」

山城は一言漏らしたきり、口を開こうとしない。

「(あれはKキャンプの方向をめざしていたようだが……。そ

うか、お前はそのへりをここで見送っていたのか」

「(そうだ……)」

山城はようやく口を開く。そして代表が特別秘書を迎えに寄越したと、その特別秘書を無理やりへりに押し込んで送り返したことを話す。

「(そうだったのか。でもケンをよく思い止まったものだ)」

「(まあね……)」

山城はなぜか煮え切らない返事をする。

「(それで命拾いしたわけだ。だが不満のようだが、一体、なにが問題なんだ)」

「(いまがチャンスなんだ。議長と代表がいるKキャンプをいまずぐ襲えば、二人を一度に捕えることができるのだ)」

「(なんだと……)」

彼はふと、アムンがKキャンプへ行くなど言っていたことを思い出す。なぜそうすべきなのか、アムンは一言も言わなかった。彼は苛立つ山城のなかで、アムンが一体なにを考えていたのかと思いを巡らす。

不意に、山城が歩き出した。

「(おい、どこへ行くんだ。Kキャンプへは行かないのか)」

山城は彼の声が聞こえないかのように歩みを止めず、ビルの内部へ入っていく。そして階段を駆け足で下りると、執務ブースのドアを開け、机に近づく。

山城が執務機の椅子に腰を下ろそうとしたとき、電話のベルがけたたましく鳴った。

「(受話器を取るな。電話に出るな。代表からだ)」

彼は大声で叫ぶ。

「(……)」

山城は耀の声に電話機へ延ばしたかけた手を一瞬宙に浮かせ、それから黙って手を引き戻す。

「(代表がチェックしているにちがいない。ケンも墜落したへりに乗っていたかどうかを知りたいのだ。とにかく、代表にはケンもへりに乗っていたと思わせておいたほうがいい。事故死した振りして身を隠し、Kキャンプへ侵入することにはどうか)」

「(うん、だが……)」

山城は煮え切らない。

「(もしかしたら、代表は感づいているのかも……)」

代表はへり墜落の報を受け、特別秘書と山城がともに事故死したものと考えたものの、念のために、電話して山城がいなか確かめたかったのかもしれない。だが電話に出ないからといって、単純に、代表は山城が事故に巻き込まれたと思うだろうか。代表はビルに残っている手下に山城を探せと命じるにちがいない。

「(なに……)」

廊下を走る足音がする。

「(ここは危ない。お前を探している。どこかへ早く隠れるのだ……)」

山城は素早く机から離れると、ドアへ突進する。そして隣の

ブースへ潜り込み、身を隠す。身を屈め、さらにその隣のブースへ移動して身を潜める。

足音が山城の執務ブースのドアの前で止まる。なかを窺っているのか、動きがない。

突然、ドアが勢いよく開閉される音がした。つづいて数人の足音が響く。物色しているのか、なかからロッカーの扉を激しく開閉するような音がする。

数人が廊下に飛び出してきた。そして散っていく。

16

「ご用でしょうか」

「あ、ハクリか……」

アムンは手を差し出し、執務机のまえの椅子をすすめる。

「実は……」

アムンはハクリが椅子に腰を下ろすのを待つて、ヨウが助けを求めてきたことを話す。

「え？ そうでしたか。それで……」

「もう帰ってしまつた」

「ミサが聞いたなら、残念がるでしょう」

「そうだ、ミサも呼ぼう」

ハクリが身を翻し、ミサを連れて来る。ハクリからヨウのことを聞いたのか、ミサは最初からふくれ面をしている。

「実は、ヨウをわたしが追い返したのだ。助けを求めてきたけど、オセロ作戦はあくまでお前一人で行うのだと言いつけてね。彼はそれで早々に引き揚げていったのだ」

「ヨウが助けを要請したとは……。なにか特別のことでもあったのですか」

「よく分からないが、Kキャンプに議長と代表が集結しているので、二人を一挙に攻めたいと考えたらしい。それで援軍を求める気になったのだろう。だがそれは極めて危険なので、決してKキャンプへは行くなと言つたのだが……」

アムンはしばし天を仰ぐ。

ハクリと未佐は顔を見合わせ、心配そうにアムンを窺う。

「二人が本部ビルに戻ってくるのを待つて行動を起こすようにと念を押ししたのに、どうやら、Kキャンプへ向かっているらしいのだ……」

「ヨウが……」

ハクリは頭を左右に振り、信じられないというふうな素振りを出す。

「耀ちゃんが山城と一緒になの」

ハクリにつづいて未佐が呟く。

「Kキャンプへ行けばワナに嵌まる。山城はKキャンプがすでに議長の管理下にあることに気付いていないらしいのだ」

「すると、ヨウも一緒にワナに……」

「多分、そうなる」

「山城がワナに嵌まつたとしても、耀ちゃんはワナに嵌まつた

山城から抜け出ることができないのではないですか……」

「そうできるとはかぎらないのだ。そうだね、ハクリ」

アムンはハクリに目を向ける。ハクリはじつと考え込んで、口を開かない。

「それにわれわれが『黒』に対抗していることに気付いているらしいのだ。山城も当然マークされているにちがいない。だから、山城がKキャンプへ行くことは、まるで『飛んで火に入る夏の虫』のようなものだ。それで……」

アムンはハクリと未佐をじつと見た。ヨウを助けるか、それとも、見殺しにするか。だが見殺しにするわけにはいかない。となれば、選択の余地はない。危険でも、ヨウの救出作戦を実行するほかないのだ。

彼はようやく決断する。

17

「ヘリが事故を起こしたそうだが、あのヘリには……」

Kキャンプの宿泊施設の一室が議長専用の執務室となつている。議長は窓を背にした執務机で、徐に顔を上げ、直立不動の姿勢で畏まっている代表に目を向ける。

「はあ……。山城を呼びにいったヘリですが……」

代表は額に汗が噴き出し、背筋を汗が流れていくのを覚えた。「それで、乗員は……」

議長の追及がつづく。

「ヘリは墜落して炎上しました。生存者はいないということですが……」

「全員が死亡したのか」

「はあ……。そう報告がありました」

「遺体を確認したのだな」

「……」

「収容してきているのか」

「……」

矢継ぎ早の問いに、彼は応え得ず、ただ口をもぐもぐさせている。だがそれは議長の性急な追及のせいだけではなかった。ヘリには操縦士のほかに、迎えにいった特別秘書と連行すべき山城の三人が乗っているはずだった。だがいくら探しても、遺体は二体しか見当たらないのだ。

「どうしたのだ」

議長は尖った鼻を突き出すようにして、なにを聞いても、口を閉ざしたまま心えようとしない彼の顔を不審そうに眺め回す。

「実は、三名乗っているはずなのに、爆発で遺体もバラバラになつてしまったようで、焼け焦げた遺体片が二体分しか見つからないのです」

代表は観念したふうを装い、あからさまに言う。

「遺体の身元は……」

「かなり損傷しているようで、まだ報告がありません。検査中です」

彼にはDNA鑑定を待つまでもなく、二体の遺体が操縦士と特別秘書のものであるらしいことはうすうす感じていた。だが知らない振りを装う。できるだけ時間を稼いだかったのだ。

「乗るはずのものは三名と言っていたが……」

「はい……」

議長がその三名は誰と誰だと聞いているのは分かっていたが、彼は答えたくない。そんな彼の態度に気付いたのか、答えを促すように議長が目を光らせる。

「操縦士と山城だとすると、あとのひとは誰なのかね」

「それは……」

彼は一瞬戸惑いを覚え、応えに窮する。彼は二体分の遺体が「操縦士と特別秘書」のものと思っていたのだ。ところが、議長は「操縦士と山城」だと考えているらしい。

てつきり特別秘書の遺体だと思っていたものが、山城のものだとすると……、彼の計画が根底から覆されてしまう。山城が事故死し、特別秘書が生きているというのか。特別秘書は墜落したヘリから逃れることができたのか、それとも最初から乗っていないかったのだろうか。

そんなはずはない。議長が勘違いしているのだ。やはり、二体分の遺体は「操縦士と特別秘書」のものにちがいない。

彼には最近、特別秘書の行動に腑に落ちないところが目についた。その傾向は議長が見えてから、とくに目立つようになってきた。かといって、そのことを特別秘書に問いたすことはできなかった。まして議長に聞くわけにもいかない。そこで、彼は

山城の迎えに出して、特別秘書の様子を見ようとしたのだった。

それにしても、議長が遺体を「操縦士と山城」のものと思っているのはなぜか。特別秘書に特別の任務を与えていたのか。

だが彼は山城が乗らないことはあっても、特別秘書が乗らないことはないと思う。山城のことだから、特別秘書を無理やりヘリに押し込み、エンジンをかけさせ、飛び立たせたのだろう。でなくとも、山城を連れ戻すようにと命じたのに対して、山城だけをヘリに乗せ、特別秘書が別行動を取ることは考えにくいではないか。

彼はケースを変えいろいろ考えてみるが、考えれば考えるほど迷い、頭の中がますます混乱していくだけであった。

「で、墜落原因はなにかね。空中で爆発を起こしたらしいが……」

議長の目が突然険しく光る。

「……………」

突飛な話題変更だった。彼は議長の顔をまじまじと見るだけで、声が出ない。一瞬、思っても見なかった考えが脳裏をかすめた。もしかしたら、議長は自分を疑っているのではあるまいか。いや、疑われているのは自分なのだ。議長が自分を疑っているのかもしれないと彼は感じた。

「ヘリに爆薬が仕掛けられていたのかね、それとも……」

議長は執拗に訊ねる。

「さあ……、分かりません。いま、調査中ですから、もう直ぐ墜落原因が判明するとおもいますが……」

彼は当たり障りない応えを選ぶ。

一体、死んだのは特別秘書か、それとも、山城なのか。彼はヘリの墜落を知ったとき、操縦士とともに、特別秘書も山城も事故死したものだと思った。

いくら探しても、三体あると思っていた遺体が二体分しか見つからなかった。そのことを知った瞬間、彼はなぜか、事故に遭ったのは山城ではなく、特別秘書にちがいないと直感したのだ。

彼は直ぐ山城の執務室に二度電話を入れた。一刻も早く、山城が生きていること確かめたかったのだ。

だが二度とも返事はなかった。山城がやはりヘリに乗っていたのか。あの遺体は山城のものだったのか。だが彼は山城が事故死したとは到底思えなかった。彼は山城がヘリに乗らず、生きていると思った。山城の日ごろの用心深さを考えると、そう思うのは当然だった。

山城の直接の上司であり、地区代表である自分が山城の事故死を疑っているのに、議長は逆だった。なぜ、議長はそう思うのだろうか。単に、尋問すべく呼び寄せているのだから、当然、それに応じてヘリに乗るはずと思っっているからか。いやそうじゃない。ヘリに爆薬が仕掛けられていなかったか聞いているところをみると、事故死と見せかけ、山城の口封じをしたのではないかと疑っているのかもしれない。議長はなにか確かな証拠を握っているのだろうか。

確かに、彼は議長の後継者選定のレースに残るため、密かに、

前もって山城や特別秘書を候補者リストから外してしまおうと思いついたこともあった。事実、山城の迎えにわざわざ特別秘書を派遣したのも、その思いからだ。二人を乗せたヘリを事故に見せかけ爆破するつもりだったのだ。だが実行段階で、彼は思い止まった。実は、それよりもっと危険性の少ない方法を思い付いたからであった。

もし議長の言う通り山城が事故死したのなら、彼が抱いていた山城に対する心配はすべて解消してしまう。もうなにも思い煩うことはないのだ。

彼はいつそのこと議長の言う通り山城が事故死したものだと思いたかった。だが頭の奥になにかが引っ掛かって離れないのだ。得体のしれない思いが彼の後ろから彼を呑み込もうとするかのように近づいてくる。彼は必死で逃げる。逃げる彼をむんずと掴まえようとするかのように、指を大きく開き、掌を広げた大きな手がするすると伸びてくる。指が彼の身体に触れた。

不意に、議長の尖った鼻が迫って来た。まるで「お前がやったのだな」と言っているようだった。

「なぜ、山城だと思いいのですか、遺体の一体が山城だと……」

突然、彼の口から低い声が出て出る。意識していなかっただけに、彼自身自分の声に驚き、議長を盗み見る。

「……………」

議長は口を開かない。

「遺体のDNA鑑定の結果を見て来ます」

彼は一礼して、急いで踵を返す。一瞬、唾然とした面持ちの議長が視界の片隅に入ったが、気付かない振りを装い、足を速める。視界から議長は直ぐ消えた。彼は一刻も早く遺体の身元を確認したかった。

18

議長は執務机で身じろぎひとつせず、突然身を翻すようにして去っていく代表の後姿をじつと見送る。

「事故死したのは山城ではないというのか。では誰だ」

代表が発した問い掛けを思い返し、彼は自問自答する。

彼には自分の考えに異を挟むものがあるとは思っていなかった。まして最も忠実であるはずの地区代表が異を唱えるとは思っても見なかったことだった。

とにかく、議長の言明は疑う余地のないものなのだ。というより、彼の言明は絶対であり、それに誰も異を挟むことはできないのだ。いや、彼には自分の言明に対する疑問など考えられなかったのだ。

それがどうしたことだ。代表までが疑っているのか。

彼はもう一度代表が残していった問いを反芻する。突然、薄っぺらな顔の男が浮かんだ。彼が代表の監視役に送り込んだ男だった。

「代表の特別秘書を呼んでくれ」

彼は秘書に命じる。

秘書の姿が消えると、彼は引き出しから山城が撮ったという女の写真を取り出し、手に取る。

「確かに似ている」

思わず、呟く。この写真がいつどこで撮ったものか知りたかった。と同時に、これまで心の奥底に押し込み、長年隠してきた秘密をむんずと大きな手で鷲掴みされたような気がしてならなかった。

山城という男は一体、なにをどこまで知っているのだろうか。そしてなぜ、この写真を撮る気になったのか。

「似ているが、あの女ではない。あの女であるはずがない」

彼はもう一度、目を凝らしてしげしげと写真の女を見る。もし、女との秘密の関係を知られてしまっているなら、あの男を生かしておくことはできない。即座に口を封じなければならぬ。

彼はいつのまにか、この男の死を願っていたのかもしれないと思つた。だから、ヘリが墜落して死者が出たと知らされたとき、その遺体の一体を山城のものと即断してしまつたにちがいないのだ。

「それにしても、代表はなぜ、山城の死に異論を挟んだのか」

彼の心中にひとつの疑念が燦り出した。

代表は山城が生きていてほしいと思つているのだろうか。それはなぜか。代表にとつて、山城が後継者争いのライバルであったのか。あの男なら、ライバルを蹴落とすためなら、ヘリを墜

落させることなど平気で実行するだろう。それなのに、ヘリが墜落したというのに、ライバルが生きていると思うのはなぜか。

代表はなぜ、山城が事故死していないと考えたがるのか。

もしかしたら、ヘリの爆破を仕込んだのは代表でないかもしれない。では誰だ。

彼にはヘリの墜落事故は不自然きわまりないものだった。誰かが仕込んだものに違いないと思っていた。彼の頭のなかでは、代表がその最有力容疑者だったのだ。

彼は代表がなにを考えているのか分からなかった。

「議長、見つかりません。代表の特別秘書はここにはいないようです。ヘリに乗って出掛けるのを見たというものもいますが、どこに行つたのか分かりません」

秘書のひとりだった。

「分かった。もういい」

彼は秘書がドアを閉めるのをじつと待った。秘書の姿が消えると、彼はもう一度、山城が撮つたという女の写真を手にし、しばらく見つめていた。

彼は写真を手にしたまま、椅子の背に頭をもたげ、目を閉じる。

脳裏に若い女がまざまざと浮かんできた。

若い女と出会つたのは三〇年も前のことだった。写真の女は若い女とよく似ているが、当人であるはずはない。別人にちがいない。だが一端波立つた彼のこころの小波は鎮まることなく、次第に大きくなっていく。

そろそろ引退すべきかと考えたとき、不意に、この女の面影が頭を過つたのだ。

引退は全く思いつきで気紛れにすぎなかったが、これを名目に、世界各地に散在する地区本部を視察することにしたのだ。この決心のどこかに女のことを知っていたかと思いがあつたのかもしれない。

とはいっても、女のことは日本地区本部を訪ねるまで忘れていた。正確には頭のどこかに微かな記憶として残つていた程度だった。なにも期待していなかった。というより、三〇年という長い時間の経過がそうさせていたのかもしれない。

そんなとき、突然女の写真が突き付けられたのだ。女に誘われたのか、無意識で何気なく代表の執務機の引き出しを引いたとき、写真の女が微笑んでいたのだ。微笑んでいる女の写真ははじめて見るものであつた。

「山城という男は死んだと思つていたのに、生きていたのか」
ふと、彼は呟く。彼は目を開け、じつともう一度微笑んでいる女の写真を見入る。

でもなぜ事故死したのは山城だと思つてしまつていたのか。議長が呼びつけたら、命令に逆らわず、万障繰り合わせて迎えるのへりに飛び乗って直ぐ飛んでくるものと思つていたからか。

彼は写真を上着の胸のポケットに仕舞ながら、山城にどうしても会わなければならぬと思つた。

「議長、まだでした」

DNA鑑定の結果を見にいった代表だった。いつもの代表とは感じが違う。

代表はなぜか、ときどき容貌がまるつきり変わるのだ。議長は目を開け、執務机の前に立っている男に好奇の目を向け、珍しそうに眺める。

「なぜか、鑑定に時間がかかっているようで……」

代表は議長が黙っているのに業を煮やしたのか、畳み掛ける。

「山城の迎えに、特別秘書を遣わしたのかね」

彼は促されたように口を開くが、そっぽ向いたままではそばそとした声だ。

「はあ……」

聞き取れなかったのか、代表は曖昧に応える。

「なぜ、特別秘書をわざわざ呼びにやったのかね。電話で呼べば済むことではないのか」

彼はへりの墜落を知らされたとき、迎えにへりを送ったことさえ、不自然に感じていたのだ。さらに、山城を呼ぶために特別秘書を派遣したとはどういうことか。それなのに、山城は来ず、特別秘書だけが事故に遭ったらしいのだった。

やはり、怪しい。事故はこの男が仕込んだのか。後継者探し中だと漏らしたばかり、この男は競争相手を事前に葬ってしまおうと企んだのか。

「そうしたかったのですが、山城は足がないからKキャンプには行くことができないと抜かしおったので……」

代表はいかにも山城のせいだと言わんばかりに、ぞんざいな口調で言う。

「それで迎えのへりか。で、特別秘書は……」

「それは山城の首に縄を付けて引っ張ってくるためです。そうでもしなければ、山城を連れて来ることはできないと思っただけです」

「なるほど……、で……」

こうすれば、二人を同時に葬ることができるというわけか。彼はじつと代表の目を見る。目はときどき彼に向けられるが、直ぐあらぬほうへ落ち着きなく動いていく。

「で、特別秘書だけが事故に遭った……」

「多分、そうかと……。山城は乗っていないか……」

「なぜ、そう考えるのだ。山城が乗って、特別秘書が乗らなかったことも考えられるではないか」

「……」

代表は口をきつく閉じ、じつと議長を見つめている。議長がなにを言いたいのか、議長の考えていることを思い巡らしているふうにも見える。

「まあ、直に、鑑定結果がでるだろうが、山城が事故に遭わず、生き残っているなら、早急に、Kキャンプに連れてくるように」

議長は言い終わるまえに、椅子を回転させ、代表に背を向け

る。

20

「ハクリ、どうするの。じかに、Kキャンプへ乗り込むのですか、それとも、山城（ヨウ）を探してみますか……」

未佐はハクリと連れ立ってアムンのもとからブースに戻ってきたところだった。考えごとに耽っているのか、途中で何度彼女が話しかけても、ハクリは口を閉ざしたまま、返事さえしない。

「ねえ、ハクリ……」

たまりかねて、未佐は大声を出す。

「ああ、ミサ、どうした……」

「まあ、話しかけても知らんぷりしていたくせに……」

「全然、聞こえなかったが……」

「いいわ、どうするの、Kキャンプへ直行する？ でも、そのままに……」

彼女は木実子たちの様子を知りたかった。火事の現場から姿を消した木実子たちがいまだどうしているのか、気がかりだったのだ。

「どうしたらヨウを連れ戻すことができるかね……。山城は議長と代表を同時に襲おうとしている。山城の身にもしものことがあるれば、一体同化しているヨウも同じ運命だ。いまのうちに

なんとかしてヨウを外へ誘き出しておきたいのだが、ミサはどうすればいいと思うかね……」

相手が死ねば、一体同化している当人は死んだ相手から抜け出ることとはできない。死んだ相手のなかに閉ざされたままになつてしまうのだ。山城と一体同化しているヨウがこのような状態になつてしまわないようにするにはどうしたらいいか、ハクリはその方法を問うているのだ。

「そうだったの。ハクリはそのことを考えていたのね。それでその方法が考え付いたのね。どうすればいいの。とにかく、耀ちゃんを探さなくちゃ」

「ミサ、ヨウを連れ戻すこと、これがアムンの至上命令だよ。いいね。なんとかして、ヨウを山城から取り戻さなくちゃ……」

「分かったわ。ハクリ、さあ、行きましょう」

未佐は飛び立とうと、立ち上がる。

第三章

21

「(ケン、大丈夫か)」

「(ヨウ、声を出さんじゃない。黙っているんだ。ここは宿泊施設の地下へ通じるゲートだ)」

ふたりは、といつても、耀は山城の身体のなかに潜り込んでおり、外観的には山城ひとりだが、眠そうな目をした守衛を欺き、地区本部ビルを抜け出ると、車を駆使してKキャンプへ向つたのだ。そして夜陰に乗り、一番警備の手薄な東側の柵を越えて広大なKキャンプのなかへ紛れ込んだのだ。

Kキャンプの統括責任者として、何年もここを活動の本拠地としていた山城には、たとえ暗闇でも、キャンプのなかは手に取るように分かるのだ。キャンプ内の施設の配置や人員の配備状況はもちろん、議長が利用している宿泊施設の内部構造についても事細かに知り尽くしているはずだった。

またここは、彼にとつても母木実子たちを奪還するために山城と一度争つたところでもあった。Kキャンプのなかに入った途端、そのときの記憶が沸々と湧いてきた。

彼はしばらく以前の記憶に耽っていたが、不意に不安に襲われた。

山城が建物のすべてが分かっているということが、彼にはか

えって心配だった。山城に過信からくる気の弛みややり過ぎが起こりしないか。

議長らが利用している宿泊施設はKキャンプの西側にある。屋上がりポートとなっているほぼ正方形の建物の周囲には常緑樹の大き木が生い茂り、まるで森のなかにひっそりと沈むように建っていた。

山城が彼に小声で話したことによると、こうだ。

森のなかに造られたこの建物には特別な仕掛けが施されていた。一旦緩急時には建物の内部が爆破されて、跡形もなく、地中に沈んでしまう設計になっているという。それは「黒の集団」自体が秘密結社の存在であり、Kキャンプは官憲の目を逃れて建設した秘密基地だったからだ。

基地内には各種の高性能の自動分析機器などを備えた化学実験施設、さまざまな超精密機器類の自動製造組立設備などが完備してあるほか、非合法的な物資や原料等が大量に備蓄してあった。そのほか、各種の重機や火器もある。そしてそれらの大半が宿泊施設の地下に造られた広大な空間のなかに隠されていたのである。

宿泊施設は地下空間に隠匿してあるさまざまなものを覆い隠すために、あとでそのうえに造られていたということだ。

地下空間は三層構造になっていて、最上部の一層目に諸施設や諸設備が設置されており、二層目が巨大な空洞のような空間となっている。普段は射撃場などとして利用しているが、ここが宿泊施設や一層目の諸施設などの上部構造物を爆破処理した

際の残骸を収納するスペースだった。

最下層部の三層目は倉庫で、各種原料、農薬などの化学合成物質、火薬類、無人ヘリ、工作機械、火器など、さまざまな物資や機器類が大量に貯蔵保管されていた。

これらが爆破処理されると、粉々になった残骸が空間を埋め、そのうえに宿泊施設の屋根部分がそのまま落下し、蓋をする仕掛けとなっているのだ。

「（内部の様子をチェックしてくるから、ここで待っていてくれ）」

「（うん、赤外線監視装置が作動しているかも。ヨウ、透明体識別装置も方々にあるからな。くれぐれも気をつけるんだ）」

山城は彼の身体が外では透明になることを知っているのだ。

「（うん、分かった。じゃ）」

彼は山城から抜け出ると、目の前が地下三層へ通じるトンネルの入口だった。大きなシャッターが下りておりいる。脇のドアの隙間から潜り込む。

22

山城は微かな音を聞いた。ドアのなかに吸い込まれていくような音だ。耀がドアのすき間から内部へ潜り込もうとしているのだ。

身動きせずに、彼はじつと音が完全に消えるのを待つ。

当初から彼には耀が戻るまで待っているつもりはなかった。

彼は決死の覚悟でこの建物を一瞬で崩壊させる計画を立てていた。これで議長、代表ともども、一挙に「黒」を壊滅させようとしていたのだった。

だがそれにはこの建物をどのように処理するのが一番いいか、彼は迷っていた。一発で爆破するか、それともゆっくり時間をかけて燻し、毒ガスを充満させるか。

一発で爆破するなら、火薬庫に火を放てばいい。毒ガス作戦なら地上の建物を燻しながら、ゆっくり地中へ引きずり込むことになる。

この建物には上下させる装置が周囲の構造壁のなかに隠されている円柱に仕掛けてあった。建物用の巨大なエレベーターだ。これを稼働させれば、宿泊施設のある建物全体を地中へ移動させることもできるのだ。

建物を地中へ移動させるなら、この装置を用いるのが一番だ。爆発音もないし、建物に損傷もない。だが装置を最高に稼働させても、完全に地中へ潜り込ませるには時間がかかるのが難点だった。

建物が一時間に一メートル沈下するのがやつとだった。建物を完全に地中へ潜り込ませるには数十時間を要するにちがいない。

かいつても、一発で爆破すれば、彼自身はもちろん、耀をも巻き添えにするおそれがあった。彼はじつと考え込んでしまう。

議長、代表ともども、一挙に「黒」を壊滅させる別の方法はないか。あれこれ考えるが、火薬庫に火を放つことだけが頭の

中をぐるぐる回るだけで新しいアイデアはなにも湧いてこない。

彼は躊躇いながらも、一挙に「黒」を壊滅させることにこだわりつつける。

やはり、火薬庫に火を放つのが一番だ。自分を奮い立たせるように、自分に言い聞かせる。

火薬庫は構造物の最下層である地下三階にある。トンネルは地下三階に通じている。もうなにも考えることはない。トンネルを通り抜け、火薬庫へ直行するのだ。そして火を放つのだ。

一瞬のうちに、大爆発を起こす。自分も粉々になって飛び散ることだろう。

口の中がからからに乾いた。彼は無言で数を数え、大きく息を吸った。そしてゆっくり吐く。

一瞬、彼の脳裏を過ぎた日々が目紛しく過っていく。今日までの日々を思い返すと、夢中でここまで登りつめたのになぜか悔いが残るのだった。

彼は脳裏のスクリーンをシャットアウトする。そして耀の潜る音が完全に消えたのを確かめると、ドアの鍵を解錠し、ノブを静かに回し、ドアを押す。

耳をそば立て、ドアのすき間から内部の様子を窺う。微かにモーターの回転音が響く。監視カメラが首を振っているのか。彼はドアをさらに少し押し、すき間から身を潜り込ませ、トンネルのなかへ入っていった。

23

ドアの上にカメラがある。レンズが微かに向きを変えながら動いている。耀はカメラを避け、トンネルのなかへ入っていく。暗闇のトンネルのなかには二車線の車両用道路が一直線に走っている。大型トラックがゆううに往き来できるほど広い。

明かりはない。彼は闇視の術を使い、左右に目を向け、周りをチェックしながら進んでいく。

トンネルの壁には点々と照明設備が設置されている。ゲートの開閉と連動しているのか、それとも通過する車に反応して自動点滅するのか。彼はトンネルの天井に沿って翔けていく。

シャッターを下ろした大きな関門を抜けると、道路の先に広大なヤードが広がる。そこは壁際に設置してある倉庫へのアクセススペースになっているのだ。

「どの倉庫に火薬が保管されているのかな」

彼はヤードの周囲に連なるシャッターを下ろした倉庫に好奇心の眼差しを向ける。時折、極細い赤い光線が走る。どの倉庫にも赤外線監視装置が設置しているらしい。

彼は直ぐ二層目へ移る。試射場を兼ねた広大な射撃場だ。天井が極めて高い。周囲に馬蹄形の廊下が走る。

まえに山城とハクリが格闘したときそのままだった。彼はしばらく廊下に立ち、当時の記憶を思い浮かべながら射撃場を眺めていたが、頭を振って記憶をふるい落とし、一層目へ向かう。

一層目には山城のKキャンプにおけるオフィスがあるはずだ。

一瞬、彼は覗いて見ようかと思ったが、ここにも赤外線監視装

24

置が張り巡らされていることを確認すると、非常階段から地上の宿泊施設へ上っていった。

宿泊用の部屋が連なる廊下に出た。廊下に面して並んでいる五つのドアのまえにガードが二人づつ立っている。そのどこかに議長が陣を取っているはずだ。そして代表もそのどこかにいるのか。それとも別のところか。

彼は廊下の端からじつとガードたちの様子を窺い、観察をつづける。なんの変化もなかった。彼は部屋の内部の様子を見たかった。

彼はひとつのドアに近づく。ドアには二人のガードのほかにもう一人が張り付いていた。彼の気配を感じたのか、そのなかの一人が振り向く。彼は身を伏せ、床に張り付き、息を殺す。

ふと、彼はこの状況を早く山城に知らせたいと思った。ドアのまえに、ガードのほかに、秘書らしい男がもう一人張り付いているのは、そのなかに議長か代表がいるからにちがいないのだ。

彼はそおつと身を起こす。そしてあたりを見回す。

その瞬間、非常ベルがけたたましく鳴った。彼は飛び上がり、身を翻えすと、山城が待っている地下への入口をめざして翔けだす。

ベルは執拗に鳴り続き、ベルの音は全館に響き渡る。

「ハクリ、どうなっているかしら、木実子さんたちは……」

未佐にはライターの火で火の海となった木実子の実家のことが気になつて仕方がないのだ。

「じゃ、途中、寄ってみることにしようか。ヨウたちの救出作戦に彼女たちを巻き込まないようにしなければならぬからな。でも時間はあまりないぞ。もしかしたら、すでにヨウたちがKキャンブへ行っているかもしれない……」

ハクリの返事を聞くまえに、未佐は火事現場をめざして急降下していく。ハクリが彼女につづく。

ふたりは庭に下り立つ。立ち入り禁止の黄色のテープが張り巡らされている火事現場には、早朝のせいかな、人影はなかった。

焼け跡を見て回る。二階の一部が僅かに焼け残っているが、玄関とリビング部分がすっかり焼け落ち、剥き出しになっている。ふたりは二階へ上ってみるが、人の気配は全然しない。

「やはり、お母さんも拉致されたのかしら……」

「大男がいたんだね……」

「あ、そうだわ。森野さんと大男がホテルに連れて行かれたのよ。お母さんも木実子さんと一緒に連れて行かれたのかしら……」

「そのホテルはどこ……」

「えーと……」

未佐はあの晩のことを思い返す。突然数人の黒い服の男たち

が現れ、森野と大男を拉致し、こぢんまりとしたホテルに連れ込んだのだ。

「近くよ。そう遠くないところだったような気がするわ」

ふたりは空に舞い上がり、ホテルらしい建物を探す。

「あそこか……」

ハクリが指差す。四階建てのビジネスホテル風のこじんまりとした小さな古びたホテルだった。

「そのような気もするけど……、夜だったからよく分からないわ」

「うむ、彼らを見付けたとしてもどうするかな……」

「決まっているじゃないの、『黒』から奪い返すのよ」

「奪え返しても安全な場所を確保できるかな」

「うーん、お家は焼けてしまったし……、どこかいいところないかしら。ハクリ、なにかいい考えないかしら」

彼らを救出できたとしても、匿う安全な場所がなければ、果たたび「黒」の攻撃の対象となるおそれがある。ことに、木実子が耀の母親であることが知れたら、そのおそれは確実に現実のものとなるにちがいない。これではかえって命の危険が増すだけで、わざわざ救済する意味がない。

「そんだ。警察に一時的に預かってもらうことにしたらどうかね」

「え？ どういうこと？ そんなことできるわけじゃないじゃないの」

「警察に大男らの居場所を通報するんだ。彼は放火犯として手

配中だろうし、木実子さんだつて産廃処理場爆破の容疑者だろうからね。いいね」

ハクリはしばらく未佐の顔を見ていたが、もう待てないという風に走り出した。

25

突然、非常ベルが響いた。と同時に、トンネル天井のビームライトが一齐に点り、不審者の姿を白昼のもとに曝す。

「やばい……」

山城は一瞬、身を隠そうと辺りを見回す。隠れるものはなにもない。強烈な光線を浴びて照らされている彼の姿だけが一層際立ち、浮かび上がっていた。

「動いてはならないぞ」

一瞬、彼がかつて自ら作製した対応マニュアルが頭を過る。そこには不審者が不用意に動けば即座に銃が火を噴くことになっていた。

彼は不動の姿勢をとり、必死に隠れ場所を探す。なんとかして身を隠くしたかった。だがどこにも隠れる場所は見当たらない。

彼はモニターに映し出されている自分の姿を思い描いた。不審者として監視カメラに撮らえられてしまったのだとしぶしぶ自分に言い聞かせ、その場で身体を固くしたものの、こころは

激しく波打っていた。不審者には自動的に方々から銃口が向けられているからだ。

「いますぐ銃で撃たれてしまうか、それとも捕らえられて処刑されてしまうのか」

彼は逃げ出したくとも、動くことはできない。

「どうするのだ。どうすればいいのか」

彼は自分に向けられている銃口の設置場所を察知しながらも、それを避けることもできず、その場に身動きせず立ち尽す。いや、身体を動かさそうにも動かないのだ

間もなくスピーカーから警告がなされ、銃を持った見張りが現れるだろう。そして不審者が逃亡を計ったり、あるいは抵抗の素振りを示せば、今度こそ、猶予なく見張りの銃が火を噴くことになるのだ。

「チャンスはいまだ。見張りが来る前に逃げるのだ。で、どうすればいいのか」

彼は必死で考える。遠くから、車の近づく音がする。ゲートの開閉音が響き、車のヘッドライトが近づいてくる。

「おいおい、前門のトラ、後門のオオカミか」

彼はハラを決め、行動に出る。レーンの中央へ出て、停止の合図する。

「止まれ」

車に向かって両手を突き出し、大声で叫ぶ。車が急停止した。

「誰だ」

車のなかから声がした。黒装束の男だが、顔が判然としない。

「山城だ、チーフの……」

彼は車に向かって怒鳴る。

「チーフ……。どうしてこんなところに……」

助手席のドアが開き、一人の男が下りてきた。かつての部下の一人だった。

「代表に呼ばれたのだ。代表のところへ行くところだ」

彼はじつと男の目を見る。部下だったとはいえ、彼はチーフを解任されているのだ。この男はそのことを知っているだろうか。知っていれば、以前の上司に対してどう動こうとするだろうか。なんとかして、この男を取り込むことはできないか。

男の目に、一瞬、不審そうな色が浮かんた。

「議長が来ているのを知っているだろう。議長に気付かれないように代表のところに行かなければならないのだ。それでここを通ってきたということだ」

「……………」

彼は急いで付け加えたが、男は黙ったままだ。

「疑っているのか。それなら、代表に『山城が来た』と伝えるんだな」

男はしぶしぶ車に戻り、マイクを手にし、連絡を取り出す。

彼は身構え、じつと男の様子を窺う。背筋を汗が流れ落ちる。

代表は迎えに寄越したへりに乗らず、夜中にKキャンプに潜り込んだことを知ったら、どう反応するか分からない。代表のとだ、射殺しろと命じるかも知れない。

彼は車のなかに目を向ける。運転席にもう一人の男が乗って

いる。車に乗っ取るか。彼は素早く計算する。

男が車から出てきて彼のまえに戻って来たときがチャンスだ。そのとき、男の利き腕を逆手に取って銃を奪い、運転席の男を引きずり出して車に乗っ取るのだ。そして乗った車で火薬庫へ向かって直進するのだ。

一瞬、火薬庫が大爆発し、宿泊施設の巨大な建物が地中へ埋没していく様子が目に浮かんだ。

男がマイクを置いた。車のドアが開く。右足を地面に下ろす。だが車から降りようとしな。そして僅かに身体を回し、後部座席を指差す。

「代表がお待ちかねだ。乗れ」

彼は男に目を向けたまま手を伸ばし、後部ドアの把手を引き、座席に乗り込む。

車はUターンしてトンネルから地上に出ると、フルスピードで走り出した。

26

「山城がいない……」

耀は非常ベルに驚いて、急いで山城と別れたゲートに戻ってきたところだった。

どこを探しても待っているはずの山城の姿がない。彼は自分のヘマで非常ベルを鳴らしてしまったと思っていたが、もしか

したら約束を破って単独行動していた山城が監視カメラに捉えられたのかもしれない。

それにしてもなぜだ。あんなに念を押ししたのに、なぜ待つてくれなかったのだ。彼は山城をひとり残したことに激しく悔いた。

まえにも山城を一人にしたことがあった。そのときも山城が単独行動を仕出かしたことがあった。というのに、また同じことを繰り返してしまったのだ。

あのとき、山城がお前を巻き込みたくないのだと言ったことを思い出した。

一瞬不吉な予感に襲われる。彼が体外に出た隙を狙って、山城は決死の覚悟で火薬庫を目指して突進していったのではないか。

彼は耳を澄ましてトンネルのなかを覗く。いままで鳴り響いていた非常ベルが止み、深閑とした暗闇がどこまでもつづいてるように感じられる。

「非常ベルが止んでしまっているのは、山城が発見されてしまったからにちがいない。一体、どこにいるのだ……」

思わず声を出す。彼は自分の声に奮い立ち、ふたたびトンネルを抜け、建物のなかへ入って行く。

ふと、山城が警備要員に捕らえられてしまったような気がしない。もし捕らえられたのなら、どうしても助け出さなければならぬ。どうする、どうすればいいのか。だが彼は山城がどこでどうしているのか全く状況が掴めず、どうしていいのか皆目

見当がつかなかった。

いっそのこと、山城の代わりに火薬庫に火を放つか。これで議長や代表も爆死していなくなれば、「黒の集団」そのものも壊滅するかもしれない。

これが「黒の集団」解体の一番簡単な方法のような気がした。だがこれでは捕らえられているかもしれない山城も道連れにしてしまう。

彼はふとモーターの回る微かな回転音を耳にしたように感じた。暗闇のなかで音源に目を向けると、首を振っている監視カメラが目についた。

赤外線カメラがゆっくり首を振り、彼にレンズを向ける。彼はその瞬間、カメラの上に乗る。

そのとき、一瞬、ぷつぷつと短い音がした。非常ベル装置が作動するときのような音だった。だがベルが鳴り響くまゝに止まってしまう。

カメラのうえに飛び乗った一瞬の彼を捕らえ損なったのか、それつきり非常ベルが鳴ることはなかった。彼は胸をなで下ろし、大きな息を吐く。

そのとき、彼にひとつのアイデアが浮かんだ。

27

「おい、どこへ行くんだ」

山城は急に動き出した車のなかでよろけ、思わず叫ぶ。男たちは口を噤んだままだ。

彼は一瞬車を乗っ取る計画を思い描く。後ろから助手席の男の首を絞め、手を上げた瞬間に手首を取って逆手に締め上げ、銃を奪うのだ。

だが暗闇だ。男たちの様子が暗くてよく分からないうえに、車はフルスピードだ。彼の動きに気付いて運転している男が急ブレーキを踏んだらどうなるか。急停止したはずみに車がどんなふうになるか分からないぞ。スピンだけで済めばいいが、車がひっくり返り、仰向けになってしまうかもしれない。

宿泊施設のエントランスの灯が見えた。車は地下から出て、建物の周りの道路を走り、一階のエントランスを目指していたのか。

「そうか。そのときがチャンスだ」

彼は車がエントランスのまえに停車したときの情景を思い浮かべる。まず助手席の男が車から降り、後部座席のドアを開け、彼に降りるように促すだろう。そのときを狙って行動を起こすのだ。

助手席の男を盾に、運転席の男を車から引きずり出し、車を奪うのだ。この辺の地理は頭の中に入っている。暗闇でも大丈夫だ。

車はエントランスまえのロータリーに近づく。彼は身体を幾分前屈みにした。

そのとき、エントランスの扉が開いた。中から数人の黒い服

の男が飛び出してきた。計画はご破算だった。

「畜生……」

彼は息を呑んだ。そして車に近づいてきた黒い服の男たちをじつと見る。見覚えのある顔があった。かつての部下か。

彼は自分でドアを開け、車から降りる。そして背を伸ばし、顔を上げる。聳えるように立っている宿泊施設の建物が目に飛び込む。

その瞬間、彼は電撃に打たれたように、火薬庫に火を放とうとしていた自分が蘇った。彼はこの宿泊施設を攻撃目標とし、議長、代表もろとも、建物全体を爆破しようとしていたのだった。

「車に乗っ取ろうなんて、一体、俺はなにを考えていたんだ。バカめ」

一からやり直した。それにはこの建物から逃げてはダメなのだ。車に乗っ取って逃げようなんて、もつてのほかだ。建物の中に入らなくては建物を木端微塵に爆破することはできない。建物を木端微塵に爆破することができなければ、議長も代表も生き残る。それでは「黒の集団」を壊滅することはできないのだ。

ではどうすればいいのか。彼はあれこれ思い巡らす。

半ば捕らわれの身になっては、導かれるままに建物のなかに入り、議長や代表と対決するほかないではないか。

「対決か」

彼は自嘲気味に呟く。代表は彼の命を何度も奪おうとしてい

たし、はじめて会う議長にしても彼にどんな要求を突き付けるか皆目分らないのだ。

そのときふと、代表が爆弾を抱えていることを思い出した。と同時に、あるひとつの考えが閃いた。

彼は自分から黒い服の男たちに近づいていく。

「案内してくれ。代表はどこだ」

28

「ミサ、あれは山城じゃないのか」

「どこ……」

彼女は急いでハクリの指差す真下へ目を向ける。

真下にはエントランスのテラスが広がっていた。ふたりは木実子たちのいるホテルから天を翔け、耀たちを探してKキャンプの屋上に下り立つところだった。

黒い服の男たちに囲まれて、一人の男がエントランスのテラスを歩み、扉からなかへ入ろうとしている。

「一寸待ってて」

こう言い残して、彼女は急降下して、山城の肩に乗り、身体に入っていく。一体同化だ。

「(耀ちゃん……)」

「(誰だ、ヨウはいない)」

「(未佐よ、耀くんは……)」

「(ミサ? ヨウの仲間か……、ヨウは様子を見に行つたんだ)」

「(どこへ……)」

「(この建物のなかのどこかにいる)」

「(それで、あなたはどうしたの、捕まってしまったの)」

彼女は幾分落ち着きを取り戻す。

「(俺はこれから代表に会うのだ)」

「(この人たちは……)」

彼女には山城の周りを取り囲んでいる男たちが気掛かりだった。周りの男たちは山城の安全を守っているよりも逃亡しないように押さえ込んでいるようにしか見えないのだ。山城は捕らえられ、行動の自由を完全に奪われているにちがいない。

「(まあ、案内役のつもりだろう)」

山城は薄ら笑いを浮かべながら言う。

「(ホント? で、代表に会ってどうするつもりなの。まさか、

耀くんを裏切つたんじゃないでしょうね)」

「(さあね、俺はこれから代表に会って、共同作業を提案するつもりでいる。まえにお前さんの仲間の一人が代表と一体同化してなにやら仕掛けをしたということだったが、それを利用してみようと思う。ヨウに会つたらそう伝えてくれ。捕らわれの身としては選択肢が限られてしまった。こうなつては、代表を喉けることぐらいしか残されていないのだ。どうなるか、一か八か、やってみようと思うのだ)」

「(……)」

「(とにかく早くヨウを探して、もうご用済みだ、さつさと立

ち去れと伝えてくれ。この建物が爆破されるまえに、早くヨウを連れて帰るのだ。いいな)」

「(もつと詳しく話してくれないと分からない……)」

「(そう言っていたと伝えてくれれば、それでヨウには分かる。じゃな)」

そういうと山城は口を固く閉ざしてしまい、二度と開こうとしない。彼女はこのまま留まって行動を共にするかそれとも耀を探すか迷い、しばらくそのまま山城のなかで様子をうかがっていた。

山城は囲まれた男たちに誘導されて歩みを続ける。代表のもとに山城を連行しようとしているのか。代表のところでないが始まるか、興味があつた。彼女はわくわくして山城と歩く。だが一方で、耀のことが気になつて仕方がなかつた。

ホールへ入って、代表用に臨時に設けられたブースのまえに出た。ドアが閉ざされている。男の一人がノックする。そしてノブに手を伸ばす。

山城とともにブースに入るか。彼女は迷う。もし山城がこのまま拘束されることになれば、外へ出ることができなくなるかもしれない。そうなれば、耀ともはや会うことができなくなるのだ。

そう思った瞬間、彼女は山城から飛び出してしまう。そしてドアのなかに山城の姿が消えると、彼女は急いで踵を返した。

「どうだったかね……」

ハクリがホールの入口で待ち構えていた。

「耀ちゃんも山城から抜け出ているそうよ……」

未佐は山城との遣り取りを細かく伝えた。

「ヨウがこの建物のなかのどこかに潜んでいるというのか。早く探して連れて帰ることにするか」

「耀ちゃんはきつと、一緒に戦おうと山城を探しているにちがいないわ。連れて帰るなんてムリだわ。ね、ハクリ、どうすればいいかしら……」

彼女は内心、耀が山城から抜け出ているいまがチャンスだと思っていた。そしてこのチャンスを逃せば耀を連れ出すことはおろか、耀ともはや会うこともできないような気がしてならなかった。かといって、耀を説得して連れ帰ることができるとは思えなかった。

「強制的に連れ帰るほかないか」

ハクリは彼女のこころのなかを讀んでいるように言う。

「そんなことをしたら、耀ちゃんに一生恨まれるわ」

「じゃ、一緒に戦うか」

「アムンは……」

「アムンは連れて帰れと言っていたが、かといってこのままヨウを見殺しにはできないだろう」

「……………」

彼女はじつとハクリを見る。

「だが言っておくが、戦う場合はあくまでも『天』の一員としてだ。山城の味方してこのやつの手助けするのではない。このことを忘れるな。この闘いは『天』対『黒の集団』の闘いであつて、『黒の集団』対『山城』の闘いではないということだよ。これなら、アムンも分かってくれるだろう」

「分かったわ。耀ちゃんもそれなら納得してくれるかもね」

一瞬、彼女はハクリが山城に対して全幅の信頼を寄せていないらしいことを感じた。というより、山城が耀を裏切るのではないかと心配しているように思えた。

「じゃ、ヨウを探そう。そして対『黒の集団』の作戦会議だ」

彼女とハクリは「黒」の監視網を避け、天井すれすれに翔ていく。

30

「どんなご用ですか。議長がお呼びだそうで……」

ブースのドアをくぐり向けると、山城は自ら執務機の代表の間近に近寄り、上から見据えるように突つ立つ。そしてことさら低い声で言う。

代表は顔を上げ、目を光らせ、彼を見上げる。しばらくして目を落とすと、顎で合図して連行してきた男たちを外へ追い出す。

「遅い。何時だと思っっているんだ。なぜ、お前はわざわざ迎えにやったヘリに乗って来なかったのだ」

「それは……」

彼は「そのヘリなら、途中で墜落したのでは」と言おうとして、口を噤む。一瞬、後継者候補を亡き者にしようとしたとしか思えないヘリの墜落事件は知らないことにしておくほうがいいような気がしたのだ。墜落事件を知っているといえば、代表は警戒するにちがいない。

「こんな遅くじゃ、議長も休まれているだろう」

「そうですか。じゃ、明日来ます。失礼しました」

彼は殊更慇懃に振る舞う。

「おい……」

代表は忌忌しげな目をして、彼を睨んでいる。彼は無視して踵を返す。そして二、三步進んだところで振り向き、代表と目を合わせる。

「代表、議長には早いほうがいいのではないのでしょうか。これから私が直接伺って見ていいのですか」

彼は一呼吸間を置いて、徐に言った。

「おい、おい、待て……」

代表は手を伸ばす。

「代表、いまがチャンスです……」

彼は急いで近寄り、耳元で囁く。

「……………」

代表は目を大きく見開き、彼を見る。目が舞っている。

「代表の身体のなかにダイナマイトが埋め込まれているんですよ。その発火装置を操作するコントローラーはどこにあると思いますか。それを早急に自分の手に取り戻したいと思いませんか」

彼は一気にまくし立てる。

「……………」

「コントローラーは議長の手元にあるにちがいません。私と一緒に議長のところに行って探してはどうですか。部屋には議長のほかに、代表と私しかいないときこそ、そのチャンスではありませんか」

じつと、代表の目を覗く。瞳が揺れている。

「うう……」

代表は呻く。

突然、執務机で電話のベルがけたたましく鳴った。椅子から代表が飛び上がる。

「はい。ただいま……」

代表は受話器を手にしたまま、棒立ちになっている。

彼は代表に近寄り、黙って手から受話器を奪い、代表を椅子に座らせる。

「議長が……」

代表の口から声が漏れ、手が宙を泳ぐ。スクリーンを指差そうとしているのか、それとも……。

「なにか……」

「議長がお前を……」

「スクリーンを通してですか。尋問なら、面と向かってでなければいやです。そう伝えてください」

代表は手を盛んに振る。

彼はまだ受話器を持ったままであることによく気付く。

急いで、電話機に受話器を返す。

代表は身体を屈めて動こうとしない。彼はじつと代表を見守る。

二人の遣り取りが彼が手にしていた受話器を通して議長に筒抜けになってしまったにちがいない。それをどう取り繕うか代表は苦慮しているのか。

電話のベルが鳴った。代表は動かない。二度目のベルが響く。彼はようやく手を伸ばす。受話器を一端取って、すぐ電話機に返す。

電話は切れ、ベルが鳴り止んだ。

「おい、なにするんだ。議長からだつたらどうするんだ」

代表が叫んだ拍子に、また、ベルが鳴った。直ぐ手が伸びた。

「はい、ただいま……」

受話器を返すと、代表は山城の手を掴んで、ブースを飛び出した。

31

「きみが山城くんかね」

思っていたより大きな声だ。議長は背の高い椅子のアームに両腕を乗せ、大きな執務机から目を上げる。視野には彼の隣に直立不動で立っている代表の姿も当然入っているはずなのに、議長は代表を全く無視しているのか、机の数メートル手前に直立している彼だけを見据えるように彼の顔に視線を固定している。彼は議長の目に吸い込まれるように前へ進もうとしたが、代表が横から手を延ばし、動きを制する。

「はい、山城ですが……」

彼は自分の声が微かに震えているのを感じた。そのことが、逆に、彼を一層奮い立たせる。彼は代表の手を払いのけ、二、三步前へ進む。

議長はしばらく彼の顔をしげしげと見ている。そしてもつと近くへ寄れというように手で招く。彼はまた、二、三步前へ進んだ。

「ところで、例の女性のことだが……」

議長は彼に耀の母親木実子のこと尋ねはじめる。

「……」

彼はじつと議長の目を見る。なぜだ。後継者探しに来ているというのに、それとは関係ない女の話とは。問い返そうとしたが、彼の口は閉じたまま動かない。

「きみはその女性をここに匿っていたそうだが、なぜかね」

議長にはすべてが調査済みらしい。

「実は……」

彼は言い淀む。

湖畔の一軒家に隠棲している木実子ともうひとりの男を監視していたときのことを彼は思い浮かべる。監視をはじめた頃は二人にはなんら関心はなかった。命じられたまま職務を遂行していたが、代表がしきりに女についての情報を求めてくるので、いつしか興味を持つようになっていった。

それがある日、突然、情報収集活動が打ち切られたのだ。そして監視の作戦までが取り止めとなり、監視プロジェクトチームが撤収することになった。これですべてが終わりのはずだったが、彼は一存であの二人を拉致し、Kキャンプに監禁していたのだった。

だがこんなことをそのまま話すわけにはいかない。代表の異常な情報収集要請に興味を持ったなどと言えるか。それに、議長がなぜかあの女に関心を示しているらしいことを考えればなおのことだ。代表がしきりに求めてきた女に関する情報が議長からの要請に基づくものあつたかもしれないではないか。

「実は、なにかね……」

議長がじつと彼を見る。一瞬、視線が動いた。彼の後ろで代表が落ち着きなくもぞもぞ動いているらしい。

「代表、用事があれば席を外していいのだよ。ここにいたければそこにある椅子に腰をかけ、身動きせず、言葉も挟まず、じつと傾聴していたまえ。それともこれが欲しいのかね」

議長ははじめて代表に気付いたように、大きな目を向ける。そして執務機の端に無造作に置いてある小さな箱形の物体を手にとった。

「それは……」

代表が身を乗り出す。

「そうだ。これはコントローラーだ。代表の体内に埋め込んである爆発物のね」

「え？ ホントですか……」

「欲しかったら、あげるよ。ホラ、投げるぞ……」

小さな箱が議長の手から放れ、代表へ向かって飛んだ。小さな箱が宙に浮き、放物線を描いていく。そして代表の手に吸い込まれていった。

「……そこにボタンが三つあるだろう。爆発物発火スイッチのボタン、発火装置ロックボタン、それにコントローラーそのものの破壊用のボタンだ。必要なときに、好きなボタンを押したまえ」

「みな同じようで、どれがどのボタンか分かりませんが……」

代表はコントローラーを手の平に載せ、じろじろ見ている。

「私にも分からない。どれに当たるか、すべて、神さまのご意思のままということになるかね」

議長はなにごともしなかったかのように、ふたたび、彼に視線を戻す。そして彼につづきを促す。

「実は、例の一軒家を監視しているときに奇妙なことが起こりまして……。星ひとつない暗闇の夜でした。突然、天空から一筋の光の綱が一軒家の屋根に向かって垂れ下がってきたのです。

驚いて見ていると、それを伝って一人の若い女が降りてきて一軒家に入っていくではありませんか。そこでチーム全員を引き

連れ、一軒家を襲い、家中くまなく探したのですが、若い女の姿がどこにも見当たらなかった。一瞬にして若い女が消えてしまったのです。実に、不思議なことでした。二人がなにかを隠しているにちがいないと思い、監視作戦が終わり、チームが撤収するとき二人を拉致してKキャンプに匿り、監視をつづけることにしたのです」

「きみの一存だったのか」

後ろで、代表が身を乗り出し、いまにも彼に襲いかかろうと身構えている。そんな代表を一瞥し、議長は短く言った。

「はい。正体が分かれば直ぐ釈放するつもりでしたから……」

「それで正体が分かったのか」

「それがいくら待ってもだれ一人尋ねてくるでもなく、変わったこともなにひとつ起こらなかった……」

「ふーむ、多分、『天』の一派の仕業だろう」

「『天』？ それは……」

彼は一瞬わが耳を疑った。議長がそんなことを知っているとは思っても見なかったからだ。

「それはもういい。ところで、きみはその一軒家の女性に見覚えがあるのか。なにやら、かなりの執心のように見受けるがね……」

「べつに、そんなことはなにもありませんが……」

彼はふとなにやら分からないが、柔らかに包み込まれるような気分に襲われた。なぜだ。あの女を思い浮かべただけなのに……。

確かに、あの女を見ていると、なぜかまえに会ったことがあるような懐かしい気分になることが何回かあった。それはなぜかいくら考えても分からなかったが、なんとなくとても懐かしい気分が襲われるのだった。

いまふたたび、そんな気分が襲ってきたのか。それとも、議長が彼に催眠をかけているのか。彼は瞼が閉じそうになるのを必死に耐え、議長を見る。視野の向こうに目を細めて彼を見ている議長の姿があった。

32

突然、非常ベルが響く。

ドアが開いて、廊下で見張りをしていた黒い服の男が飛び込んできた。

「議長、館内に侵入している不審者が発見されたようですが……」

「分かった。外へ出ていなさい」

一瞬、議長は険しい顔になったが、男を追い出すと、直ぐ以前の顔に戻る。そしてなにごとくなかったように、ふたたび山城に細い目を向ける。

「きみが匿っていたお陰で、私もその女性とその母親に会うことができた。わざわざこの国にきた甲斐があった……」

別人のような声の響きだった。彼は驚き、無言のまま、目を

見張る。

「……若い頃、この国を訪れたことがあるのだ。引退するにあたって、もう一度この国を訪ねてみたいと思った。後継者探しと称して全世界を回ってきたが、それは嘘だ。引退後、人生の最後の一時を、この国で、若い頃の想い出とともに、過ごしたいと思っていた。それでこの国を訪れ、隠棲の住み処を探して回ったが、残念なことに、何処も彼処も合成化学物質に塗れ、異臭を発し、この国にはそれに適したところは残されていないなかつた……」

議長は大きなため息を吐き、しばらく宙を見つめていた。

「……………」

彼は腑に落ちず、なぜかと問いたかつた。だが声にならないのだ。彼はそれ切り一切口を挟もうとせず、議長の話に耳を傾ける振りをしていた。ただ、時折、耀のことが脳裏を過る。

「……人間にはバックグラウンドを考えずに、自分本位に考える癖があるようだ。ことに現代科学技術文明の支配する近代社会においてはそれが顕著だ。そしてそこにあるものを存在するものとして把握するまえになぜそこにあるかと問いたがる。人間は考えるから人間であるのではなく、考えようが考えまえが人間は存在し、存在する人間が考えるのだろうか。存在するものは形として実感し、手に取ることも可能だが、考えることは形はなく際限なく広がっていくのだ。そしてわれわれ錬金術師は存在するものから離れてまず考え、考えを際限なく先へ先へと進めていった。一時はそれでよかつた。でも最近はそういかなく

なつた。存在するものの存在が制約やネックとなつたり、新たな問題を生み出したりしてきている。そこで私は将来を見越してさまざまな手を打ってきたつもりだつた。たとえば、最近の世界人口適度化対策などもそのひとつだ……」

「……でも認識が甘かつた。そして根本的な誤りを仕出かしてしまつたのだ。地球における有限性の顕現化（制約条件）という状況に対応して思考システムも根源から見直す必要があつた。無限を前提とする『無限指向思考』から有限前提の『有限制約思考』への変換が余儀なくされているのに、それを無視していたのだ。無差別な分析一本やりを貫き、全体的なバランスを軽視していた。そして、行き詰まれば時間稼ぎの小手先の対応でお茶を濁してきた。これは大きなそして取り返しにつかない結果をもたらすことになつてしまつたのだ……」

「……この国に来て、これまで推し進めてきた対策行動が完全に間違つていたことを知らされたのだ。余生をのんびり過ごそうと隠棲の地として選んだこの国は、私が推し進めてきた小手先の対策で隅々まで合成化学物質漬けになつてしまつていたではないか。自然の生態系はずたずたになり、完全に破壊され尽くしていたのだ……」

議長が口を押さえ、考え込む。

「それは違う。われわれは利用されていたにすぎないのではないですか」

金切り声が出た。代表だ。

「きみはわれわれが大企業に利用されていたと言いたいのかね。」

確かに、大企業はあらゆるものを商品化し、収益最大化のビジネスモデルを駆使して、ときには詐欺まがいの商法を駆使して、国家主権の規制をはね除け、グローバル化を押し進めていった。消費者の欲望に火を付け、消費者を狂わせ、大量生産システムのもとで大量消費大量廃棄を促した。だがわれわれ錬金術師が気軽にさまざまな合成化学物質をつくり出さなければ、こうにはならなかったのではないかね……」

議長は自分に言い聞かせるように言う。

突然、非常ベルが鳴り響いた。二度目だ。

ドアが勢いよく開け放たれ、黒い服の男が駆け込んで来る。室内の空気が揺れた。開放されたドアのすき間から風が吹き込んだのか。

「議長、複数の不審者が近づいて来ているようですが……」

「分かった。ドアをきちんと閉め、誰も入れるな」

議長は男を追い返す。それから執務机のうえの置き時計に目をやる。

「(なんだ。ヨウか。いつ来たんだ)」

彼は議長から目を離さず、静かに問い掛ける。

「(いま、開いているドアから入ってきたところだ)」

耀が彼に一体同化したのだ。

「(非常ベルが何度か鳴った。お前たちの企みか)」

「(まあな……。で、一体なにしているんだ、こんなところで

……)」

「(議長の話を聞いているところだ。お前こそ、こんなところ

まで来るとは……。早く出ていってくれ)」

「(議長と心中するつもりじゃないだろうな。ケンにはまだまだ仕事が残っているぞ。早くここから出るんだ。もうじき爆発するぞ……)」

「(なんだと……。おい、議長が見ている。感付かれるぞ。もう口を開くな。早く出ていくんだぞ、いいな)」

彼は耀の相手を止め、彼に目を向けている議長をじつと見返す。

「……もう手遅れかもしれない。われわれはあまりにも手を広げ過ぎてしまったようだ。化学の分野で化学物質の合成を手掛けてから、いまでは遺伝子組み換えなど生物の分野を越えてさまざまな分野にまで錬金術を応用してしまっている。だがそのためにかえってデタラメになってしまっているではないか……」

次第に声が大きくなった。議長は熱を帯びてきているらしい。

「……ときには悪魔の手先と言われたこともあったが、われわれには自負と誇りがあった。われわれは自らの権威を有し、時の権力とも安易に妥協することはなかった。われわれには自分たちの主義主張があった。われわれは人びとのため、そして社会のために行動してきたのだ。それがいまはどうだ……」

「……」

「……権力にすり寄り、権力のいうままになって恥じようとしてない。これをいいことに、大企業はわれわれを恣に使い、収益拡大に走る。そしてこのような大企業は国家主権を超えてグローバル化し、各国の政治勢力をも取り込み、超国家集団としての

多国籍企業体を形成し、地球をわが物顔に支配している……」

「……多国籍大企業という魔物は収益最大化を指向する強者本位の経済システムに世界の政治や社会を組み込み、世界の九九パーセントの人間を隷属化している。そして彼らは過去を破壊し、未来を食いつぶし、ひたすら現在を肥大化させ、自らの懐だけを大きくしようとしている。そのような構図のなかで、われわれ錬金術師がいつのまにか悪魔に魂を奪われ、献身的奉仕を余儀なくさせられてしまっているのだ……」

「……われわれはいつ権力や大企業のしもべに成り下がったのか。そして人間を蔑み、人間を食い物にするものに手を貸すようになったのか……」

「……だがこのようなことは決して長続きすまい。いやもうすでに破綻している。それに気付かないのは人間だけなのだ。生態系が綻びかけていることに気付いて、もろもろの生物は安住の場所を求めてさまよいはじめているではないか。われわれも本気でつぎの居場所を探さなければならぬ時期に来ているのだ……」

議長は大きく息をついた。そしてしばらく宙を見つめていた。

「……そこでだ。私は決心したのだ。引退を機に『黒の集団』の組織を解体することにしたのだ。山城くん、私がこのような考えを持つようになったのは、きみのせいだ。代表の特別秘書からの情報もあつて、このところのきみの行動をつぶさに見ているうちに、そのような考えを持つようになったのだ。もしきみが私のこれまでの仕事に興味があるならば、錬金術師の誇り

を取り戻すためにどうすべきか考えてもらいたいのだ……」

「なんで、山城なんですか。自分が……」
代表が大声を発した。

「自分の特別秘書をいとも簡単に抹殺しようとするような男にそんな資格があるとは到底思えない」

議長は冷たく言い放つ。そしてふたたび山城に目を返し、早くここを立ち去るように命じる。それから議長は目を代表に転じ、近くに来るように、手招きする。

代表は一瞬躊躇う素振りを見せた。だがそれとは逆に代表は議長のそばへ躊躇り寄っていく。それはまるで代表の意思を超えたような動きであった。

彼はじつと代表の動きを見ていたが、ふたたび議長の目と合うつと、彼もひとりで踵を返し、ドアへ向かって歩き出していた。

33

山城がロビーを抜け、エントランスを出たとき、小さな爆発音があつた。彼がいままでいた宿泊施設の議長専用に使っていた部屋あたりらしかった。

身を翻し、中へ駆け込もうとしたとき、大きな爆発音がした。地面が揺らぎ、下から突き上げられるような衝撃を感じた。

彼は反射的に建物から離れ、森の中に逃げ込んだ。振り返る

と、建物は大きく傾き、静かに地中へ沈んでいった。

第四章

34

「（おい、なにが起こったんだ……）」

「（宿泊施設の建物が沈んでいく。外へ出て見てみる）」

山城が言うままに、耀は急いで抜け出る。

何度も小爆発音がつづく。その度に建物全体が段階的に沈んでいき、宿泊施設が地中へ吸い込まれるように姿を消していく。

「ケン、あれはどういうことなんだ……」

「うん……。おい、どうしたんだ、お前は……」

山城は目を大きく見開き、彼をしげしげと見ている。

「あつ……」

彼はあらわになった自分の姿に気付く。一体同化した山城の体内から出ると自動的に透明体になるはずなのに、一体これはどういうことか。彼は急いで透明体に戻ろうとするが、うまくいかない。何度試みても、そのままだ。

「（ヨウ、直ぐ基地へ戻りなさい）」

突然、声が出た。アムンからの帰還命令だった。

「（耀です。はい、了解しました）」

一瞬、彼は山城と離れたくないと思った。いま、ここで別れば、二度と会えないような気がしたのだ。だがアムンの声はいつになく厳しいものだった。

「おい、どうしたのだ……」

「うん……」

彼は曖昧に言葉を濁す。頭のなかでアムンの厳しい声が響く。脳内で反響するのか、何回もつづく。

「……」

山城が心配そうな目をして覗いている。

「帰還命令が……」

「そうだったのか。それで透明体に戻れなくなったんだな。前は一度帰った方がいい。特別な話があるのかもしれないぞ」

「うん、直ぐ戻ってくるから、ここで待っていてくれ。どこにも行っちゃいかんぞ」

「分かった。じゃあ……なあ……」

山城はじつと彼を見ている。彼は天へ向かって舞い上がる。

35

「あ、耀ちゃんだわ。どうしたのかしら……、ハクリ」

未佐は空を見上げて、指差す。小さな物体が天を翔ている。

耀だ。不思議なことに、外界では透明体になるはずなのに姿をあらわにしたままだ。

「アムンが帰還命令を出したのだろう。ミサ、われわれも急いで戻ろう」

「でも議長たちが……」

爆発寸前に、彼女はハクリとともに建物の外へ飛び出したのだ。そして上空に留まり、建物が地下へ埋没していく様子を一部始終見守っていた。だが議長たちがどうなったかまだ確認できなかった。

「多分、議長も代表も、建物ともども一緒に地下へ埋まってしまっただろう。さあ、ミサ、われわれも戻ろう」

ハクリが天に舞い上がり、翔け出す。彼女も後を追う。

36

「ハクリ、戻ったか。ご苦労さん。で、ミサは……」

アムンは一寸顔を上げただけで、執務机に座ったままだ。そして分厚い書類のページをしきりに捲っている。

「只今、戻りました」

しばらくして、未佐が遅れて入ってきた。

「ああ、ミサか。ご苦労さん。これでみんなそろったか」

「耀くんはまだ……」

彼女は僅かに声を高めた。いくら探しても耀の姿が見当たらないのだ。ブースにも姿はなかった。アムンのところかと思いい、駆け込んだのに耀の姿はない。戻っていると思っていたが、まだ戻っていないのか。もしかしたら、耀と思った人影がそうではなかったのかもしれない。もしかしたら、耀もあの爆発に巻き込まれてしまったのだろうか。

「ヨウか。ミサ、心配しなくてもいい。ヨウは隣の部屋で休んでいる。きみたちが帰るのを待っていたのだ」

アムンは執務机から立ち上がり、隣の部屋に入っていた。しばらくして、アムンがひとりの青年を従えて出てきた。

「まあ、耀ちゃんがこんなに立派になって……」

彼女は驚きの声を上げる。

「ハクリもこつちへ来てくれ」

アムンは三人を応接セットへ導く。ハクリを隣に座らせ、耀と未佐にソファを勧める。そしてソファのふたりをしげしげと見る。それから徐に口を開いた。

「きみたちも薄々感じていただろうが、私たちはここを離れることになった。これまで直にいろいろ手助けを試みてきたが、もう、止めることにしたのだ……」

そしてアムンは「前々からその予定でいたが、『黒の集団』の議長と日本地区代表が爆死した機に、決行することにした……」とつづける。

それから椅子から立ち上がり、執務机に戻った。そしてページを開いたままにしてあった分厚い書類を手にし、ふたたび応接セットに戻り、椅子に深々と腰を下ろす。

アムンは書類を示し、大きく息をつく。そしてこんなことを言った。

「……ここに人類が地球上に誕生して以来の行状が書いてあるが、これを分析した結果、人類はいまや、われわれの予想を超越した全く別次元の世界に入り込んでいることが判明した。そ

して知ってか知らずかは知らないが、人類は自ら絶滅へ向かって舵も切ってしまっていると思われてならないのだ。『黒の集団』の議長もこのことに気付き、行き詰まったのだろうか……」

「……それでこれを打開するために、議長もさまざまなことを試みたようだが、どれもこれもうまくいかなかった。自ら善かれと思いついてきた合成化学物質がこうまで地球環境を汚染し尽くすとは、当初、予想もなかったのかもしれない。『身から出た錆』と言えればそれまでだが……」

「……環境が汚染されるということは、大気や水域、土壌が汚染されるだけではない。そこに棲む生き物すべてが汚染され、人間の食べるものもすべてが汚染されるということなのだ。合成化学物質による汚染はそれだけでは収まらない。安価な食べ物を潤沢に確保しようとそうえにさらに合成化学物質を添加している。このようにして合成化学物質を大量に使用し、食べ物を合成化学物質漬けにしまっているのだ。そのなかには安全か安全でないか不明な合成化学物質がかなり含まれているようだ……」

「……農作物の生産量を増やすため、大量の殺虫剤や化学肥料が使われている。なかには遺伝子組み換え作物専用の殺虫剤を開発し、遺伝子組み換え種子とセットで売り込んでいるものもある。またあるいは牛、豚、鶏などの家畜や各種の養殖魚介類には抗生物質や成長ホルモン剤などの薬品が大量に与えられているし、さまざまな食品には合成香料や着色料、化学調味料、各種増量剤や乳化剤、保存料などのさまざまな合成化学物質を

大量に添加されているということだ……」

「……要するに、現代文明をエンジョイする現代人が食するたべものは、まず、自然界の汚染で合成化学物質に汚染されたうえに、生産過程や製造過程でさらに各種の合成化学物質漬けにされているわけである。それなのに、多くの人が嬉々として香料や合成着色料で化粧を施された安価で見た目のいい合成化学物質漬けの商品を買い求め、喜んで食べ散らかしているのだ。いまや、一事が万事、こんな具合だ。人類は自ら好き好んで合成化学物質を大量に摂取して省みないので。こうなつては私たちの手に負えない。もはや私たちには出る幕はない。それで、ここを離れることにしたのだ……」

「……ヨウとミサを連れていくか、それともここに残すか、大いに迷った。だがふたりには人類の一員として、ここに残り、その最後を見取つて欲しいとも思うのだ。ふたりには当面いまの仕事のつづきをやってもらい、人類はどんな未来を選択するのか、しつかり見届けてほしいのだ。いや、もつと積極的に人類の未来に関与してもいい。自分たちであるべき人間界の姿を描くこともいいだろう。このために、ふたりはもう一度人間界へ帰るのだ。人間界へ戻れば、これまでのさまざまな術は使えない。その代わりに、ふたりには永遠の命を与えよう。天翔ることは忘れ、こんどは地を這うのだ。そして地上のさまざまな問題と正面から取り組み、解決していくのだ……」

「……人類が地球上に出現してから数百万年しか経っていないが、この一万年に人類は急速に変貌してきた。ことに、この二、

三百年は、いや、この数十年は全く目を見張るものだった。それがいまさらに加速しているのだ。人間が無制限性を前提とする現代科学技術を牛耳るようになって、巨大化高度化大量化を指向し、闇雲にこれを強力で推し進めてきた結果だ。それでも地球に余裕がある間はまだよかった。だが巨大化大量化はこれまで地球の有限性と衝突するようになっていし、高度化はいまや、人間は異次元の世界へと導きつつあるのだ。というより、現代科学技術文明の巨大化高度化大量化は相互に相まって相加相乗してさらなる超巨大化超高度化超大量化をもたらしているのだ。たとえば、高度化で生み出されてものがさらに巨大化大量化されて超高度化されるといった類いだ。それでも人間は飽き足らず、見境もなく、気が狂ったように、なおもさらなる巨大化高度化大量化を推し進めようとしている……」

「……人類は現代科学技術を武器に、個々の事象の模倣から巨大なシステムの構築へと展開していった。そしてさらなる巨大化高度化大量化の果てに、いまや、人間は地球の有限性といたるところで衝突を繰り返しているのだ。地球の有限性を凌駕するような行動は、地球上に生きるものとしてやるべきことではない。それは天に向かった唾する行為ではないか……」

「……『黒の集団』がもたらした合成化学物質の地球汚染などはその一部に過ぎない。人間は地球のいたるところを掘り起こして鉱物やエネルギー資源を取り出し、大量の鉱物やエネルギー消費してきた。そしてその過程で大量に生じた不用物をとことかまわず放置し放出し廃棄していった。その結果、地球温暖化

などさまざまな地球規模の環境問題を発生させてしまったのだ……」

「……限りある地球環境に大量の廃棄物を放置放出すればどうなるかは、誰にも分かっているようなものだ。それに拘わらず、高等動物と自ら称する人類は、ますますスピードをあげて科学技術の巨大化高度化大量化を推し進めているのだ。これにともなう生産システムの巨大化高度化とともに、経済システムのグローバル化を図り、市場の巨大化を進めていった。さらに詐欺まがいの博打商法で消費を煽り、世界規模で大量生産大量消費大量廃棄を軌道に乗せていった。そしてその果てに、さらなる地球規模の環境悪化を引き起こしているのだ……」

「……地球環境問題だけが問題なのではない。爆発的に増加している世界人口はどうか。人口の集中する過密巨大都市はどうか。エネルギーが足りないからといって、取り返しのきかない放射能汚染をもたらす原発はどうか。多くの国々が保有する原子力爆弾などさまざまな大量殺戮兵器はどうか……」

「……人間が生み出したさまざまな問題は、結局、人間自ら解決する以外ないのだ。大変困難なそして成功するとはかぎらない仕事だが、これをヨウとミサに託したい。これらはすべて、人間の生き方そのものが問題となるものだからだ。このために、これからふたりには永遠の命をもって人間界へ戻るのだ……」

「……もろもろの問題を解決するにあたって考えておくべきことはこうだ。いま人間が生み出している個々の問題は個別的な個々の問題のように見えても、相互に複雑に絡み合っているの

だ。されにそれらを取り巻く各種のシステムがその問題を倍加して激化していることを見逃してはならない。たとえば、ダイオキシン汚染でいえば、目の前の産廃やゴミの処理場からの排煙を目の敵にして焼却炉を爆破しても、そこからの排煙が解消することがあっても、ダイオキシン汚染問題が解決することにはならない。ダイオキシン汚染問題は排煙対策だけを考えればいいという問題ではない。廃棄物を焼却するか、それとも埋め立て処分するかといった処理方法や、それぞれの処理技術といったことのほかに、生活や産業活動のあり方、そこからのゴミや廃棄物の発生の仕組みから大量生産大量消費大量廃棄を仕掛ける経済システムや社会システム、それに無為無策の政治システムなど、これを取り巻くもろもろのことが複雑に関係してしているからだ。また人びとの問題意識の低さに起因している側面をも忘れてはならないだろう……」

「……とにかく、ふたりがこれから向かい合う問題は、すべてが相互に複雑に絡み合っている難しい問題なのだ。個々の問題を蔑ろにする必要もないが、個別的な単純な問題はひとつもないのだ。複雑かつ解決困難な問題ばかりだろうが、これに立ち向かい乗り越えていかなければ、問題を解決することはできない。そしてこれができなければ、人類の未来は拓けないのだ……」

「……人類の未来はふたりの肩にかかっている。このまま人類が絶滅への道を歩みつづけることになるのか、それとも、人類が自ら過ちに気付き、これを一人ひとりが是正して、新しい未

来を拓くことができるか、それはヨウとミサのふたりの行動如何なのだ……」

「……私たちが地球に留まるか、それとも、別の星へ旅立つかはまだ定かでない。ふたりには重い宿題を置いていくが、どこにいても必要があれば、いつでも手助けに来るつもりだ……」

「……この書類を置いていこう。なにかの参考になるかもしれない。では、ヨウ、ミサ、また会う日まで。ハクリ、ふたりを人間界へ送り届けてくれたまえ。私はしばらく残務整理しなければならぬ。じゃ……」

アムンは立ち上がり、執務机に戻る。

37

「さあ、ヨウ、行こう。ミサ、行くよ」

ハクリは立ち去りかねているふたりの背を押し、アムンの執務室を出る。そして先立って歩きはじめる。

「忘れ物はないかな」

ハクリはふたりを振り向く。私物を持たないふたりには忘れ物などないことは分かっている。だがすっかり落ち込んでいたふたりに声を掛けたいはいられないらしい。

「ハクリ、ブースに寄ってもいいかしら。耀くん、どう……」

彼女は耀と過ごしたブースをもう一度見ておきたかった。

「うん、でも一寸だけだよ。山城が待っているんだ」

耀は気忙しく言う。

ハクリは立ち止まって、しばらくふたりの様子を窺う。そして徐に踵をブースの方向へ回した。

日本ブースには人影がなかった。いつも閑散としていたが、彼女にはそれでもなにか暖かみを感じさせるものがあつた。だがいまはなぜか寒々しく感じられた。早く出てしまいたいときえ思う。

「もういいわ、ハクリ、ありがとう」

彼女はふと人間界へ帰る自分がなぜか薄汚く思えた。かといって、帰りたくないわけでもなかった。なぜか、ただなんとなく寂しかった。彼女は耀を振り返った。いつもと変わらない顔だった。

「じゃ、行こう。ヨウはどこに行きたいんだね……」

「Kキャンプの森。あそこで山城が待っているんだ……」

「Kキャンプか。いいだろ。じゃ、Kキャンプへ向かつて飛ぼうか。一度はそこへ行くが、そのあとは私の指示に従ってもらうよ。人間界へ帰るといつても、そのプロセスはそう単純じゃないからね。ふたりともいいね」

ハクリが空に舞い上がる。ハクリの姿を追いかけ、ふたりがつづく。「天の基地」を離れていくのに、なぜか彼女にはなんの感慨の湧かなかつた。かといって、これからのことにこころがわくわくするような思いもなかった。

38

「ここがKキャンプなの。本当に、ここにKキャンプがあつたの……」

目の前に雑草の生えたただの原っぱが広がっているだけだつた。その奥に森がある。耀は森へ向かつて走っていく。

ハクリは黙って、耀の後ろ姿を見ている。

「耀ちゃん……」

耀が森の中に消えた。じつと耀の後ろ姿を見ていた未佐が急に思い出したように走り出した。

「ミサ、戻りなさい。ヨウも直ぐ戻ってくるから」

ハクリの声に立ち止まり、彼女が振り向く。そしてハクリのもとに帰っていく。

「耀ちゃんは大丈夫かしら。もう戻ってこないかも……」

声が震えている。

「必ず、戻ってくる」

「ホント？」

彼女はじつとハクリの目を覗き込む。目が小刻みに揺れている。

「間違いない」

ハクリは短く言う。

「そうお……」

彼女は半信半疑だ。

「そうだよ。いくら探しても山城を探し出すことはできないだ

ろう。彼はそこにはもういないのだ」

「……………」

耀も手の届かないところへ行ってしまうのではないか。

「山城はヨウと別れて、自分の道を選んだということだ」

「自分の道？ ねえ、ハクリ。わたしたちが人間界へ戻るとい
うことは一体どういうことなの。一度死んだわたしがもう一度
生き返るといふことなの。耀ちゃんが山城といつか会うことも
あるの……………」

彼女はアムンの話を聞いたときからの疑問をぶつつける。

「そうだ。いや、私が見付けたときにはミサもヨウもまだ息を
していた。死の寸前に『天の基地』に連れてきたのだ。だから、
厳密に言えば、ふたりはもともと生きていたので、今回の行動
は単に『人間界へ戻る』ということだ。『生き返る』というの
は適切ではないが、周りの人びとはミサもヨウも死んでしまっ
ていたと思っっているかもしれない。となれば……………」

「……………」
そうだったのか。あのとき自分がまだ生きていたのか。彼女
は自分に何度も同じことを問うていた。だがこれからどんなこ
とが起こるのか皆目見当がつかなくなった。

「ミサはどう思うかね。いや、どうしたいかね。これまでの
『天の組織』での生活をすべて忘れたいかね、それとも、現実
のなかに留めておきたいかね」

「どうということ……………」

「ミサは確かヨウのママと『一体同化』したことがあるね。そ

のときのことを人間界へ持っていききたいか、それとも、その記
憶を消却してしまいたいのか、どっちだね」

「そうね。木実子さんの立場では消却してしまいたいと思うで
しょうね。ご本人の秘密に関することが含まれていたから」

「分かった。だが問題はヨウだ。ヨウの場合、『天の組織』で
の生活の記憶を消却してしまえば、山城とのことも消えてしま
うし、また、あのときの年齢に戻ることになる。ヨウは納得す
るかな……………」

「それはムリだわ。耀くんは決して『うん』と言わないわね……」

彼女は一瞬、焼却炉に向かって手製の茶筒爆弾を投げた幼い
耀を思い浮かべた。焼却炉からの煙を異常に嫌う母木実子への
思いからの行動だったが、それは自分に関心を向けさせようと
する母に対するデモンストレーションでもあった。

「そうなるよ、元の生活に戻ることは難しいな。母親とも離れ
離れになるが、それでもいいかな……………」

ハクリはじつと宙を見ている。

「そうね。でもハクリ、どうしていまのままじゃダメなの。
『天の組織』の一員のままじゃいけないわけがあるの」

彼女は耀に距離を置いて接していた木実子を思い浮かべる。
耀と木実子の関係がもう一度あのような状態に戻るかと思うと、
彼女自身どうにも気が進まなかった。そして一方的に耀もこの
ままの生活を望むにちがいないと思ってしまうのだ。

「もう一度アムンに頼んでみるかい」

ハクリは未佐の目をじつと見ている。

「できれば……。でも耀くんが……。遅いわね……」

「ミサ、アムンはこう考えているんだよ……」

ハクリはアムンの考えを代弁するように言う。要旨はこうだった。

「天の組織」はすべての生き物のために地球環境の状態が最適に維持されるように努めてきた。人類が誕生してからもこれに変わりがなかった。むしろさらに熱心にこれに取り組んできたと言つてよい。だが人類が文明化していくに従い、少しずつ変化が生じ出していったのだ。

最近になって、高度な現代科学技術文明が急展開し、極端に巨大化高度化大量化を推し進めていくにしたがい、地球の有限性と衝突するようになった。最近になって、地球温暖化などさまざまな地球環境問題が顕現化しているが、これがそのなにより証拠だ。そしてこれは人類だけではなく、地球上の生き物にとつても、生命の存続が危ぶまれる事態の到来を意味するものだった。

アムンはなんとかしてこのような事態から地球を救い出そうと必死に努力したのだ。だが非常に難しいことだった。

というのも、最近、人類が急展開させている現代科学技術文明には、地球環境問題のほかに、いくつもの重大な問題を内包してしまっているからである。そしてこれらが複雑に入り組んで絡み合い、ひとつの問題塊を形成しているのだ。それゆえに、これらの諸問題を解決するには、まず、その問題塊を解きほど

き、問題点を取り除き、再構成する必要がある。このためには現代科学技術文明そのものを根源的に見直し、作り直すほかにないののである。

これはまさに、これまでの現代科学技術文明に変えて、新しい文明をつくり出すことにはかならない。となれば、もはや「天の組織」の手に負えるものではない。どのような新しい文明をつくり出すかは、人類一人ひとりの選択に関わるものであつて、「天の組織」や、ましてアムンがどうこういうことのできることでないからである。

「……ミサ、ということなんだよ。とにかく、地球環境問題とはいえ、現代科学技術文明の見直しに関わることとなれば、もはや、アムンが口出しできる問題でないということなんだ。というより、ミサやヨウたち人類一人ひとりが自分の問題としてこの事態をどう考え、どう対処すればいいかを考え、そして行動するほかないということなのだよ……」

ハクリは焦点の合わない目をしばらく未佐の顔に向けていた。それから、ふたたび口を開いた。

「……となれば、ミサ、自ずからなにをなすべきか、そして自分のミッションはなにか分かるだろう。アムンはミサとヨウにも、人類のための、そしてすべての地上の生き物のための新しい文明を地球に構築して欲しいのだよ。アムンはきみたちふたりにそれをこころから期待しているのだよ。いいね」

「なんの話なの……」

突然、声がした。いつのまにか、すらりとした耀青年がふた

りの背後に立っている。

「あ、耀ちゃん、いつ戻ったの……」

未佐が驚きの声を上げる。

「ヨウが幼いヨウに戻るか、それとも、いまのヨウ青年のままか、どちらがいいのかと話していたのだよ」

ハクリはにやりと笑う。

「そんな話じゃなかったようだけど、まあ、いいや……」

耀は未佐をちらりと見る。

「で、ヨウ、ヤマシロに会ったのか」

ハクリだ。

「うん、またボクを待たずにどこかへ行ってしまったらしい。

ボクを一人置き去りにするとは酷いやツだ、全く……」

耀は俯き加減でぼそぼそと応える。

「やはり、そうだったか」

「え？ ハクリ、どうして……」

彼女は少し離れて初めて見るような目をしてふたりの遣り取りを見ていたが、耀が山城と会えなかったと聞いてなぜか内心ほつとするものを感じて、不意に声を漏らしてしまったのだ。

「ヤマシロはKキャンプとともに消えてしまったのかもしれない。もしそうでなかったら、彼はヨウといつでも会えると思つて、ここから去って行ったのかもしれない。彼にはやるべきことがたくさんあるだろうからな。ヨウはどうするんだ。ミサも。ふたりとももうすぐ人間界へ戻るんだ。早く決めることだ」

ハクリはこともなげに言い放つ。

「耀ちゃん、どうする。ママと暮らしたいの。それとも……」
彼女がハクリに代わって、確かめる。

「……ママのもとに戻るなら事故時に救急車で病院へ搬送され、いままで入院していたことになるのね、ハクリ。ママのもとに戻らなくてもいいのなら、適当な場所を選んで人間界へ入り込むんですね。どっちにする……」

「……」

耀は黙って、じつと未佐の顔を見ている。

「耀ちゃんか、耀くんか……。どっちがいいのかな。でも……」

「でも……、なーに……。お姉ちゃん」

ママと過ごしていた時を思い出しているのか、耀が一瞬あどけない表情を浮かべる。

「……」

彼女はママと暮らしたいなら、幼児に戻ることになるのだと念を押す気であったが、口を噤んでしまう。彼女自身自立しなければならぬと思いつつも、耀のこととなると踏ん切りがつかないのだ。幼いころの耀に戻って欲しいのか、それとも青年耀のままでもいいのか、自分でも分からないのだ。

「ハクリ、このままでいいです。ボクは山城と一緒に『黒の集団』と闘ったボクでいたいのです。そしてこのまま人類の未来に立ち合っていきたいのです」

「おう、よーし……」

「でも……、ホントにそれでいいの……」

彼女はハクリが目を輝かせているを見て、なぜか、脳裏を不

安が過るのを感じ、思わず大声を上げた。

「……………」

ハクリと耀が驚いて、振り向く。

「ミサ、どうしたの……」

「だって、ハクリ……」

彼女は幼いはずの耀がママのもとへ帰りたいにちがいないと思っていたのに、全く思い掛けない耀の言葉に度肝が抜かれた思いだった。一体、いつの間に、五歳足らずだった耀がこんなに成長してしまったのか。彼女自身、アムンの話を聞きながら、「天の組織」の一員としてのこれからの使命を考えていたもの、十分理解できていないところがあつたからだ。

「ヨウ、ママに会いたくないのか。一端、ママのもとへ帰つたらどうかね。ミサもそう思っているらしいようだ……」

ハクリが諭すように言う。

「母には会いたいと思います。でも、一端母のもとに戻れば、いまのぼくになるまで何年も掛かってしまうのではありませんか。人類の未来にはそんな余裕が残されているのですか。いまならまだ間に合うものが、何年後には間に合わなくなっているかもしれないではありませんか。母にはいつでも会えます。心配はご無用ですよ。さあ……」

耀はきつぱりと言う。そして未佐を一目見てから、ハクリを促す。

39

「ハクリ、教えてください。われわれは世界のどこを目指し、手始めになにをどうやるのが一番いいのですか、人類の絶滅を阻止するためには……」

かつてKキャンプの宿泊施設の建物があつたらしい跡地は原っぱに変わり、一面、太陽の陽を浴び、浮き上がって見える。耀は原っぱの中央に立って、燦々と降り注ぐ陽光に照らされて輝いている草木を見惚れていた。

太陽光線を受け、一葉一葉を輝やかせている草花を見ていると、地上の生き物すべてが生き生きと息づいているような感じられ、彼には人類が絶滅への道を歩んでいるとは微塵にも思えないのだ。そして人類の未来に関わると言つたものの、行動の具体案がなにも浮かばなかつた。

「……………」

ハクリは口を閉じたまま、じつと地平の彼方へ目を向けている。

「人間界へ戻つたら、目の前の問題を一つ一つ解決していけばいいのではないかしら。できることから、ひとつずつやるほかないわね……」

未佐は黙っているハクリに同意を求めるように言う。

「それでは間に合わないかもしれない。もっと効率的に現代科学技術文明の問題点を是正していかなければと思うんだ……」

彼はアムンの話を思い出しながら、これからとてつもない大

きな問題に立ち向かわなければならぬのだという思いで一杯だった。だが具体的にどうすればいいのかよく分からないのだ。

でも一刻も早くその問題を解決したかった。早く解決しなければ、人類は確実に滅びてしまうことだろう。彼は藁をも掴む思いでハクリをじつと見つめる。ハクリは依然として地平に目を向けたままだった。

ハクリの目が揺れている。彼にはハクリがなにかしら迷っているように見えた。なにを迷っているだろうか。

「……ねえ、ハクリ、われわれはこれからどこへ行ったらいいの、そしてなにを……」

ハクリは彼の成長を支え、「天の組織」の一員となるまでに導いてくれた先生であり、さまざまな術の指南役だった。そのハクリがなにを迷っているのだろうか。彼はハクリの迷いを追いやるように、さらに問いたがす。

「ふむ……そうだね、ヨウ。まず、地球の成り立ちを思い出してごらん……」

ハクリは論すように話し出す。

多数の隕石が降り注ぎ、地球の核、マントルが形成され、火の玉のような地球が姿を現すと、その周りを大気が覆い、表面に海洋がひろがっていった。それから数億年後、最初の生命が誕生した。そして酸素が増加し、多細胞生物が出現するのは三〇億年も後のことだった。いまの人類が出現するまでには、さらに、一〇億年が必要だった。

四六億年の地球の歴史のなかで、人類が出現したのはつい最

近のことなのだ。その人類がごく短時間のうちに巨大な力を持つようになつて、ついに地球を牛耳る。人類は自らの利益を求めて勝手気儘に振る舞い、自分の都合のいいように地球（自然）の改造を自由に行なつてきた。すべて自分たちが地球で快適に暮らそうという思いからだつた。

だがその意図に反し、人類はかえつてさまざまな災厄に見舞われ、人類はいまや、絶滅の危機を迎えつつあるのだ。

「……なぜそうなつたと思うかね、ヨウ……」

現在の地球は、基本的には、まず、地球の周りをとりまく大気圏、それに、表面を覆っている海洋などの水域圏、それから大陸などの地殻や地球内部のマントルと核などからなる地圏、の三つの圏から構成されており、そこに何十億年もかけて生物生態系が形成されてきたのだ。そしてその生物生態系の一員として、つい最近人類が加わつたというわけである。

ところがつい最近生物生態系に出現した人類がわが物顔に猛スピードで地球を改変しているのだ。それも五〇〇万年の人類の歴史のこの数百年の出来事である。いや、地球を著しく改変し出したのは、西ヨーロッパ諸国ではじまった産業革命後のこの百年か二百年のことだ。いまなお、現代科学技術を武器に、さらにスピードを上げて地球を改変しているのだ。

その結果、地球規模で環境が著しく改変されてしまった。大気には二酸化炭素などの温室効果ガスが急増し、地球温暖化をもたらしている。それに地球規模の環境汚染だ。大気はもちろん、河川や海洋、土壌はさまざまな有害物質で汚染されてしまつ

ている。さらに、自然破壊がすすむ。森林は大規模にわたって伐採され尽くし、海浜は埋め立てられていき、生物生態系が破壊され分断されている。そしてこれらはいまもって留まるところを知らず、世界のいたるところで激しく進んでいるのだ。

「……なにがこうも激しく人間を駆り立てているのか。私には気が狂ったとは思えないがね……」

ハクリはわがことのように、憤慨し、大きなため息をつく。そして気を取り直してつづける。

「……これらはなんどもアムンの言っているように、産業革命後に急速に発展した現代科学技術文明のもとで、無限性を前提に巨大化高度化大量化を極端に推し進めてきたために間違いない。だが有限な地球でこんなことをしてはいずれ行き詰まることは誰の目にも疑いのないことだろう。それにもかかわらず、これを推し進めるものはなにか。これが問題なのだ。欲に踊らされた人間の狂気と言ってしまえばそれまでだが、この辺のところを徹底的に解明しなければ、有効な対応の仕方や解決策はできまい……」

現代科学技術文明は人間の精神を超えて特殊な技術だけが極端にまで進んでしまっている。利益を生み出す分野の技術以外は見向きもされない。そして一部の人間が利益を得るためにこれを独占し、他の多くの人間からなけなしの金をむしり取るために使われているのだ。欲に駆られた貪欲な人間には地球環境のことなど一切眼中にない。そして人と人が相争い、騙し合いやごまかし、あるいは力にものをいわせ、強い人が弱い人を食つ

て、なにがなんでも、利益極大を目指してまい進するのだ。

「……人間は欲の塊なのか。人間のなせる業と言うべきか。それにしても、人が人を食ってまでそうするとは、浅まし過ぎる。ヨウ、そう思わないかね……」

「それで、それらをやっつける具体策はなにかありませんか、ハクリ……」

「もう、手の下しようがないところまで来ているのかもしれない。もしかしたら、アムンも、そして『黒』の議長もそう考えていたのかも。ヨウ、そう思わないか……」

「ホントですか。『永遠の命』を与えておきながら、そんなこととてありますか。ハクリ、本当のことを教えてください。アムンが本気でそう思っていたのですか」

彼はこう言いながらも、ハクリの言っていることが本当のようない気がしていた。議長が自らの失敗に言及していたときのことが脳裏に浮かんだ。

山城のなかにいるときだった。そのとき、議長が山城と代表をまえにして無差別な化学の展開に錬金術師のプライドが失われていくのを危ぶんでいたのだ。そのときはなぜそう言うのかよく分からずにいた。もしハクリの言う通りなら、議長自ら命を絶とうとしていたのかもしれない。

「ヨウ、私にはアムンの気持ちがよく分かる。ヨウとミサに『永遠の命』を与えたいと思っただのは、希有な高等動物である人類にまだ一縷の望みを抱いていたのかもしれない。とにかく、きみたちには少なくとも、今後人類がどのような道を辿るか、

十分見極める義務が残されていると思うよ。『永遠の命』を与えられた以上、最低限、これだけはやらなければならないことだ。人類最後の歴史を記録に残すことだね。分かるね……」

「……………」

彼は黙ってハクリをじつと見る。

「ただひとつ、だけ、言っておこう。ひとつの比喻だが、地球システムをひとつのマンションに喩えれば、こうだ。マンションの建物のなかには無数の部屋がある。逆に言えば、これらの無数の部屋がひとつのマンションという建物をつくりだしている。それとちょうど同じように、地球システムにも無数のサブシステムがあつて、これらの相互関係からひとつの全体としての地球システムが形成されている。ところが、現在、欲に狂つた人間が利益を極大にするために、まるでマンションのなかの部屋の壁を取っ払い、ひとつの大きな空間をつくりだすようにして、有限な地球でさらなる巨大化高度化大量化を推し進めようとしているのだ。分かるかね、ヨウ。いま、人間社会に必要なことは、ひとつの大きな空間ではなく、小さなさまざまな多様な空間じゃないのかな。一部の人たちの利益を最大にする大きな空間ではなく、個々の小さな部屋をたくさんつくり出すのだよ……」

支配空間を大きくするようなシステムの巨大化は、システムの多様性を阻害し、脆弱化をもたらす。そして効率一本槍の巨大システムは、一端危機に直面すると全面的にカタストロフイヘ傾き、その道をまっしぐらに進みがちなのだ。

現代科学技術文明の塊のような集中型巨大過密都市がそのひとつの例だ。

集中型巨大過密都市には、たとえば、ライフライン、交通通信網など各種の巨大システムが入り込んでいるため、極めて脆弱で、カタストロフィックな危険と隣り合わせにある。そればかりではなく、さらに、過密都市はウィルスなどの微生物感染症の標的にもなりやすいなど、その他からの影響も極めて受けやすい。そしてこれらの危険はすべてメガデスを招きかねないものだ。

このようなカタストロフイの危険を避けるためには、要は、多様性を取り戻すことだ。巨大システムは多様なサブシステム群へ、あなたまかせの他力本願の巨大過密都市はすべからく自給自足を根底とする分散型小規模都市あるいは適度集落のネットワークシステムへと転換していくことだ。ここがポイントだ。

「……………」

「皮肉を言えば、日本の社会は極めて効率的に出来ているね。構成員である人びとは従順で、施政者の号令には無条件で従うようだしね。もし人類社会絶滅の国別順位付けをすれば、ここ日本は世界のなかで一、二を争う国だね。なぜか私には分からないが、絶滅のサインが出ているのに、これを全然無視して、ただただ施政者が言う経済成長の掛け声におとなしく夢をいつまでも見ているし……。よくもまあ、地に足がついていない国民らしいね。だがこれを逆に、絶滅回避のために生ずることができれば、これまた、世界に類を見ない国になるかもしれない。」

れないがね……」

ハクリは大きく息を吐く。そしてつづける。

世界人口が七〇億人を超え、やがて一〇〇億人にも迫ろうとしているなかで、日本は高齢化率が世界一だ。出生率の低さはどうだ。

これらを見ても、この国の将来が分かるうが、そのうえ、食糧の自給率の低さはどうだ。それにこれからはいままで以上に大雨や日照り、強風、竜巻、巨大台風、熱波に寒波などの異常気象が頻発し、温暖化による気候帯変化が加わり、日本全体が温帯から熱帯に変わるというのに、人口の大半を占める都市住民らはもちろん、行政担当者も食糧自給率のことをあまり気にかけていないらしい。

とにかく、高齢者のみになろうと、食糧自給率が低かろうと、今日明日が支障なく暮らせればいいのだ。そして将来のことなどなんらお構いなしということか。

この国の人びとはとことん現世第一主義らしい。だとすると、国の未来を考へることもなく、全く行き当たりばつたりか。

それによくもまあ、この国の農業関係者はかつての毒ガスを改良した合成化学物質の農薬が好きだ。農作業の省力化のためか、それとも農業従事者の減少によるものか、小さな国なのに、世界的に見て、なぜか農薬の消費量がダントツに多い。

あの「黒の集団」の働きかけが功を奏したのか、農業者団体も農薬メーカーの片棒を担ぎ、農家への売り込みに余念が無い。そのせいか単位面積当りの農薬散布量が世界有数なのだ。

そのうえ、田畑だけでは足りず、森林にもところかまわず空中散布する。平地や山地の別なく、やれいもち病だ、やれマツクイムシの退治だ、と官民上げて年中行事的な全国規模の農薬空中散布だ。

この農薬の散布だけでも合成化学物質による激しい汚染なのに、これに加え、家畜や養殖では多量の抗生物質や各種の合成化学物質の投与が日常的に行われているのだ。

このような生産段階での食糧の合成化学物質汚染だけでも足りず、毎日食べる各種加工食品にも保存料、殺菌剤、各種合成化学調味料、各種増量剤や乳化剤、香料、甘味料など、数多くの合成化学物質の添加剤をたんまり使用する。

そのうえ、医者にかかれば、大量の薬が処方され、まさに薬漬けの状態だ。生活習慣病の創設や高血圧の基準見直しとかで大量の新患者を生み出して、さらなる薬の投与服用が押し付けられる。医療行政関係者たちの陰謀か、「黒の集団」による策謀か、頻繁に行われる基準の見直しや創設によつて、人びとは新たに患者とされてますます合成化学物質の厄介となることになるわけだ。

好むと好まざるにかかわらず、大量の合成化学物質を身体の中に取る込んでいる現代人にはさらなる災難が待ち構えている。

工業地帯や工場群から排出される各種合成化学物質に加え、過密都市からの大量の生活排水や車の排気ガス、さらに、隣国からの越境汚染が加わり、毎日呼吸する大気や飲用水を取水する水域はもちろん、ささやかな家庭菜園の土壌までがすつかり

汚染されているのだ。

そのうえ、地球の火山地帯に位置する狭小な国土の海岸べりにつぎつぎと見境もなく原発を集中立地してきた揚げ句の果てに、とうとう水素爆発、メルトダウン連発の重大事故を起こしてしまった。国土はもちろん、海洋にも広く高レベルの放射性物質が飛散し、大規模な放射能汚染地帯ができてしまったのだ。

農薬等の合成化学物質汚染に放射能汚染が重なり、文字通り、日本列島は環境大汚染地帯と化したのだ。これだけでもこの国の将来が危ぶまれるのに、政治も社会の関心もいまいちで、未だに金力ネだけの経済成長第一点張りのようなのはどうしたわけか。

それに地球温暖化といった地球規模の環境問題への関心の薄さはどうだ。ただただ目をつむり、自らの生活だけが第一で、未来の地球には一切関心がなく、地球環境がどうなるうとお構えなしということか。

「ヨウ、そうがっかりするな。だからこそ、やり甲斐もあるとも言える。もしここ日本で成功すれば、それは人類救済の世界モデルとなるだろう。とにかく、人間界への復帰は、ヨウ、それにミサもここ日本からはじめることだね。これまで話したことがそのためのヒントになるといいね」

ハクリは耀に発破をかけるように言う。

「分かりました。でも、日本が……」

彼はいささか意気消沈してしまっていることをハクリに見破られたことが羞ずかしかつた。「黒の集団」との闘いでまがり

なりに勝利したと思っただけに、ハクリの指摘は堪えた。

それにしても、日本列島が人類絶滅の発端の地となるかもしれないとはどういうことか。なぜそうなのか、彼にはどうしても理解できなかった。だがなぜかこの指摘に彼自身すっかり狼狽えてしまう。

「そうだ。このままの状態で行けば、ここ日本から人類の絶滅がはじまるだろう。日本の劇的状況について、私がこれまで指摘してきたことは、極めてうわべの出来事だけにすぎない。そのうち、ヨウも気付くことだろうが、その深層ではもつと凄じことが進んでいるのだ。そして日本列島においてこの数十年のうちに隠れていたいろんな問題がつぎつぎに顕在化してくるだろう。そしてこれらに対する対応如何によつて、日本の命運が決まることだろう。ヨウ、力の限りを尽くせ。日本から人類絶滅がはじまらならないように努めることだ。それじゃ……、ミサ、ヨウと協力して……」

ハクリは少し離れたところで、じつとふたりのやり取りを見ている。未佐にも声をかける。それから彼と彼女に向かつて交互に手を振りながら、去っていく。

「待つて、ハクリ……」

未佐が追いかける。

「未佐さん……」

彼は彼女の後を追おうとしたが、足がもつれて転んでしまう。そして地面に激しく身体を叩きつける。

一瞬、土の臭いがした。彼は土の臭いを嗅ぎながら、以前こ

んなことがあったような気がした。それはいつのことだろうか
と思いながら、彼は次第に意識が遠のいていくのを感じた。

40

「耀ちゃん……」

遠いところで自分の名前が呼ばれているようだ。耀は瞼を開
けようと腕く。だが何度試みても瞼は閉じたままだ。目が開か
ない。何も見えない。夢の中だ。

名前を呼ぶ声が次第に近づいてくる。彼は声のする方向へ顔
を向ける。

「耀ちゃん、目を開けて……」

直ぐ近くで声がする。彼は親指と人さし指で瞼をこじ開ける。

目の前に薄ぼんやりとひとの顔が見える。焦点が合った。

「あ、未佐さん……」

「耀ちゃん、周りを見て……」

彼は立ち上がる。空は厚い雲に覆われている。

「よく見て……」

彼の横で、未佐はじつと地平を見ている。彼は目を凝らして
前方をじつと見つめる。最初は薄暗い靄しか見えなかったが、
次第に目が慣れてきたのか、靄を通して屏風のような黒い陰が
つづく。

「あれは一体なんだ……」

一瞬、雲の隙間から太陽が覗いたのか、一条の光が差し込む。
「おお、あれは……」

黒い陰のように見えていたのは砂丘らしい。周りを見渡すと、
木々は一本もなく、一面荒涼とした荒れ野だった。

「これは……」

「耀ちゃん……」

未佐にも見当がつかないらしい。彼は振り返って、未佐を見
る。以前と比べて、着ているものが古びて見える。ところどこ
ろに綻びすらあった。急いで自分の着ているものを確かめる。
未佐と大して差異がない。綻びたところから裸身が覗いている
ではないか。一体どうしたのだろうか。

彼は地面に腰を下ろす。そして頭を抱え込む。

「ハクリと別れてから、どの位経ったのかしら……」

彼の隣に腰を下ろしながら、未佐がぼつんと言う。しばらく
宙を見ていたが、やがて彼に目を向ける。

未佐は口をもぐもぐさせる。

あのとき、ハクリをしばらく追ったが、すぐ見失ってしまう。
仕方なく引き返してきたところ、耀が気を失い、倒れていた。
いくら呼んでも気がつかない。助けを呼ぼうと人を探して回っ
たが、人の姿はどこにもなく、日も暮れてしまった。睡魔に襲
われ、未佐は耀の横で横になったのだという。そしてそのまま、
未佐も眠ってしまったらしい。ようやく気付いて、声をかけた
というのだ。

「そうだったのか。何日も眠っていたのか。一体、どの位眠つ

ていたのだろうか。十日や一ヶ月ではないかも。着物がこの有様じゃ、かなり経っているよね。もしかしたら、一年以上かもしれないな……」

「もつとかも。十年、あるいは百年とか……」

「まさか……。いくら永遠の命だとしても、そんなに長くつけて眠っていることできるかなあ……」

「でもこの周りの風景は異様よ。わたしたちは草が一面に生えている野原にいたのよ。鬱蒼と茂る森も近くにあったし、木々も青々とした葉をつけていたじゃない」

「うーむ……」

「とりあえず、近くに人がいないか探してみましようよ」

「うん……」

彼は立ち上がる。そして歩き出す。未佐が後ろから追ってくる。

いくら歩き回っても、人影はおろか、一軒の人家さえ見当たらない。一本のススキさえなく、ただ荒涼とした風景だけだ。

岩石や砂利が目立つ砂地の荒れ野が延々とつづく。不思議なことに、鳥のさえずりや虫のなき声もない。

もしかしたら、眠っているうちに、人類は絶滅してしまったのではないか。突然、彼の脳裏を不吉な思いが過る。ハクリが

日本が人類絶滅発端の地となると言っていたではないか。

彼はただ歩きつづける。たとえ人類の絶滅が始まったとしても、どこかにまだひとりぐらひは生き延びているだろう。そのひとりを探し出して、絶滅へ至った経緯を聞き出したい。人類

はどのような顛末の果てに引き返しのできない絶滅へと進んでいったのか。このことはどうしても聞いておきたかった。

彼は歩きつづける。日本列島をくまなく歩き、生き残りを探すのだ。もし日本に生き残りがいなければ、中国大陸へ渡ろう。

それでも会えなければ、シルクロードを抜けて、ヨーロッパへ向かうのだ。そしてアフリカ大陸を縦断してから、南米、北米大陸へ向かおう。それでも発見できなければ、アラスカからシベリアへ渡ろう。ロシア、北欧諸国、北極圏だ。それから南下して、南アジア諸国だ。そこからオーストラリア大陸などオセアニア諸国を回ろう。

永遠の命があるのだ。もし人類が絶滅してしまったのなら、せめてその顛末を知りたいものだ。そう思いながら、彼は歩きつづける。

「耀ちゃん、耀ちゃんてば……」

耳元で大きな声がした。身体が揺すられ、頬が叩かれた。目を開けると、未佐の顔が目の前にあった。

彼は未佐を横に押し立て立ち上がり、辺りを見回す。地面には草が一面に生え、木々は緑の葉に覆われていた。

「あ、夢だったのか……」

「え？ 夢、どんな夢……」

彼はいま見ていた夢のことを話ながら、あれは夢でなく、これから始まる本当の出来事なのではあるまいかと思った。

エピソード「終わりなき物語」のはじまりもしくはヨウとミサの記録またはヨウの独り言

「終わりなき物語」は「天の組織」から永遠の命を与えられたヨウとミサが過去（ヨウとミサ）を振り返りながら、人類の未来（ヨウとミサ）を探る果てしない旅の物語である。

「天翔け地這う」は非意図的生成物である化学物質「ダイオキシン」問題をめぐる話からはじまった。人類はいま、「ダイオキシン」汚染のような現代科学技術文明がもたらす全く意図しない事象の出現に悩まされている。

二〇世紀以降、現代科学技術文明が巨大化高度化大量化の高度段階にいたるにしたがい、ますますこのような非意図的生成物現象も巨大化高度化大量化し、ついに、人類は絶滅の危機に直面させられるまでになっている。現代科学技術文明の主人であるはずの人類が、自らの利益を求めて推し進めてきた現代科学技術文明の巨大化高度化大量化によって滅ぼされようとしているのである。

二一世紀に入つて、この「ダイオキシン」問題と同じようなような事象がつつぎと人類を襲い、人類はつつぎもさつちもいかないうちに追い込まれていった。そして人類はついに絶滅の危機に直面していったのだ。

人類絶滅の危機的状況は、日本でも顕著に現われていたにも拘わらず、これには一切目もくれず、経済成長一点張り、なぜか、政治や行政はもちろん、人びともこれに対する反応は鈍かった。

毎年台風にも見舞われる地震国日本では、人びともすれば地震や台風といった自然災害に目を奪われがちだった。たとえ夏に猛烈な熱波に見舞われ、熱中症に戦慄こうと、冬の寒波に地球温暖化の危機をすっかり忘れてしまうのだ。

こんなふうで、日本では現代科学技術文明がもたらす非意図的生成物や副作用への関心がいまいちの状況にあつたのかもあしれない。ことに、多くの人びとは自らの利益のためにつくりだされたものに対しては一切信じて疑わず、ひたすら信奉するのみといった生活態度だった。これは長年天候に支配されつづけた農耕民族のDNAのなせる業か。

このような状況のもとでも、ヨウとミサ（「天の組織」から永遠の命を与えられた耀と未佐）は人類絶滅の危機への対応をいろいろ試みる。だが、現代科学技術文明にとつぷりつかつた人びとは現代科学技術文明のもたらす見かけの「美酒」に酔い痴れ、まるで水から熱湯になるなかで「茹で蛙」のように忍び寄る人類絶滅の危機に気付こうとしなかつたのだ。

人類絶滅の危機をもたらした現代科学技術文明の非意図的生成物や副作用問題は、日本一国にとどまる問題ではなかつた。人類絶滅の危機も瞬く間に全世界に伝播していった。グローバ

ル化している世界では一国の問題は全世界の問題だったのである。

二一世紀初頭、にわかに、現代科学技術文明の限界があらわになった。だが誰も気付かなかった。世界経済の流れは実物経済の産業資本主義から金融工学のもとITを駆使したマネーゲームの博打型投機金融資本主義へと向かう一方、科学技術ではIT分野、遺伝子技術、ナノテクノロジー、分子生物学分野などの先端技術分野だけが極端に進展していった。

このような跛行的流れのなかで、大半の人びとは戸惑わされ、成果のおこぼれをあてがわれるだけで、置いてきぼりを食い、取り残されていく。人びとの間の格差が拡大し、そして格差の壁は乗り越えられない大障壁となつていった。このような格差は経済的な貧困格差にとどまらず、科学技術的な格差までが拡大し、人間に格差による差別が生じはじめていた。

このような背景のもとで、ヨウとミサは人間界へもどり、日本の地に足を踏み入れたのであった。ふたりはアムンやハクリの教えや助言を守り、いろいろ試みるが、日本は世界の大きな流れに乗り込もうとする一方で、なぜか取り残され、孤立化していた。

過去の文明史からみて、二一世紀は西洋文明から東洋文明への文明転換の世紀のはずだった。だが現代科学技術文明は西洋文明東洋文明の枠を超え、グローバル化をめざして、世界文明化していった。西洋文明を基盤とする現代科学技術文明の世界

文明化は、西洋文明の世界文明化でもあったのである。

それでも現代科学技術文明を東洋文明化へ導くチャンスはあった。現代科学技術文明の最先端を進む日本、そのあとを猛スピードで追い越そうとする韓国、それにつづく中国、この三国が連携協力して、他のアジア諸国や地域と手を携え、一大東洋文明圏をつりさえすればよかつたのだ。

世界人口の半数を超えるアジアに一大東洋文明圏が形成されれば、人類は絶滅への道とは別の道をたどつたかもしれない。生物である人類はいずれ絶滅するとしても、人類絶滅の危機はいささか遠のいていたにちがいない。東洋の考えの根底には、西洋文明に見られる直線的な思考とは異なり、古来から循環的思考が息づいているからである。もつとも、世界文明化してしまつた東洋文明にどれほど期待できるか分らないが。

だが世界文明化した現代科学技術文明は強力だった。西洋文明圏の反撃もしぶとかつた。かつてアジアに点在した植民地の旧宗主国英仏蘭などの各種勢力による暗に陽の働きかけや米英政権らの分断的戦略外交などに加え、アジア諸国間の対抗意識や経済発展段階の違いもあつて相互理解相互協力が遅々として進まず、とうとうアジアが統一した歩調をとることはなかつた。

このような外在的内在的理由から、西洋文明から東洋文明への文明転換は消え、また現代科学技術文明に代わる新文明を提示されることもなく、人類は絶滅の危機を迎えることになつたのだ。

二一世紀に入つて、現代科学技術文明がもたらした地球温暖化は確実に進んでいった。世界の平均気温は産業革命以前と比べ、すでに約一度上昇していた。

二一世紀初頭のある年を振り返つておこう。

日本では、冬には北日本で大雪があり、五メートルを超える積雪をみた。夏にはほぼ全土が猛暑に見舞われ、秋には超弩級の雨台風に襲われた。

その年、世界を襲つた主な異常気象はつぎのとおり。

日本から中国中部で、三月、七、八月に異常高温。米国東部で一月、四、六月、一〇月に異常多雨。米国中西部で九月に記録的豪雨。ヨーロッパでは、一、三月、五、六月に異常多雨。トルコ・エジプト北東部で一二月に異常低温。インド北部で六月に大雨。フィリピンで一二月に過去最大級の台風。オーストラリアで高温、一、九月には過去最高の月平均気温。

以上はほんの一例に過ぎないが、いままで雨の降らなかつたところで大雨が降るとかといった異常気象が毎年手を変え品を変えて世界各地を襲つた。それでも人びとは地球温暖化に無頓着であつた。ましてこれらの異常気象が現代科学技術文明のもたらしたものであることも、自ら引き起こしているものであることも、つゆにも思わなかつた。

こうして地球温暖化は年々深刻化していった。世界中の人びとはまさに「茹でカエル」の心境にあつたのだ。そして誰にも気付かれることなく、人類は自ら自分の首を絞めていったのである。

世界の気温上昇の危険ラインは世界平均二度である。平均二度上昇ということは、ところによっては一〇度上がるところもあれば、逆に、一度下がるところもあるのだ。これらを集計して平均して二度上がつていけば平均二度上昇ということだ。これを超えると、とてつもない異常気象が常態化するばかりでなく、海面も急速に上昇するなど、ケタ違いの影響が生じることになる。

世界の気温上昇を二度以内に抑えるには、二酸化炭素（炭酸ガス）などの温室効果ガスの許容量は炭素換算で総量約八〇〇ギガトンであると試算されている。それが二一世紀半ばにいたつて、温室効果ガスの大気中への排出量はすでにこれを超えてしまおうとしていたのだ。

これも別名エネルギー文明あるいは炭素文明とも呼ばれる現代科学技術文明のもとで、経済成長を優先に、豊かで便利な生活を追い求め、野放図に石炭石油などの化石燃料を湯水のように浪費した結果の全く意図しなかつたツケなのだ。それも予期しないツケの「倍返し」だつた。

まだ地球の平均気温は二度まで上昇していなかつたにも拘わらず、異常気象が常態化してしまつていた。世界各地で、猛暑、干ばつ、洪水、山火事、水不足、水質悪化、食糧減産、食糧不足、生物の絶滅、森林枯死、海岸浸食、デルタ地帯など沿岸土地（低地）の喪失、感染症の蔓延などが日常茶飯事となつていたのである。そして地球の温暖化による気候帯の変動にともない、温帯から寒帯にかけて森林破壊が極度に進み、棲息する動

物も住み処を失い、追い出されていった。こうして人類の生存とも密接に関係する陸上の生物生態系の崩壊へとつながっていくのだ。

生物生態系の崩壊は陸上だけにとどまらず、海洋においても進行していた。海水温の上昇は魚介類の棲息域を大幅に変えてしまった。また大気中の二酸化炭素濃度の増大により、海水の酸性化も進み、海生生物、ことに貝類の生存域に著しい悪影響が生じていた。さらに、海面上昇による沿岸部の侵食で、干潟や漁礁が破壊され、魚介類の産卵場所や棲息域が奪われていった。

異常気象からもたらされる影響はこのようないわば一次的な影響にとどまらない。さらに二次三次のさまざまな影響を社会や経済へおよぼしていく。さまざまな異常気象は言うまでもないが、陸上、海洋の生物生態系の崩壊は人類社会に致命的な影響をおよぼすのだ。そしてこれはまさに人類絶滅の引き金であり、そのはじまりであった。

まず、異常気象による農業生産量の落ち込みは人口増加のつづく世界での食糧減産は即食料難に直結し、数億にもおよぶ飢餓人口の増大をもたらした。ことに、異常気象による水不足は深刻で、産業用水や農業用水の不足を招き、生産活動はもちろん、さらなる食糧減産を招く。

食べ物と十分な飲み水の確保すら困難となっていくた住民の間では食糧や水の奪い合いから小競り合いが日常化し、やがて地域間や国家間の争いを引き起す。ついに、近隣諸国を巻き込

んだ大戦争へと発展していった。そして食べ物や水を求める大量の飢餓難民が世界を彷徨い出した。

その一方、じわじわと海面が上昇していた。海面上昇に加え、台風やサイクロン、ハリケーンの超大型化による強風等により、二〇〇三〇メートルを超える高潮が沿岸地域を頻繁に襲い、沿岸を浸食し、低地を水没させていく。多くの世界の沿岸大都市は水没するか、頻発する洪水に悩まされた。また大河川の河口に広がる広大なデルタ地帯も同様に水没して、人びとは広大な農地や生活域を奪われていったのである。

こうして数億人、いや数十億人におよぶ多くの人びとは居住地や農地を失い、環境難民となった。人口稠密地帯であるアジアとアフリカから大量の環境難民が「北」へ押しかけていくことになったのだ。

食を求める大量の飢餓難民と住み処を探す大量の環境難民が大挙して「北」諸国の大都市をめざした。これはまさに、かつての「北からの南下」した匈奴に代わって、食を求め住み処を求める大量難民の「南からの北上」であった。

だが「北」の大都市も疲弊し、以前の活気を失い、受け入れる余裕もなかった。年毎に激化していく異常気象に都市機能が追いつかず、大挙して流入する難民に食糧や水の供給も途絶えがちで、居座る大量難民に社会環境が急速に悪化し、衛生状態も極度に悪くなっていく。

都市は一大スラムと化し、一度感染症が蔓延すると、必ず大量死が発生した。現代科学技術文明の輝けるひとつの成果とし

ての巨大都市の姿はすでになかった。大量の人びとが死んでいくだけの死者の集積所にすぎなかった。

国連がいくら旗を振っても、各国は自国の対応で手一杯だった。とても他国の援助まで手が回らない状況だった。このような状況下で、食糧や水争いからはじまった小規模な戦争はやがて世界全体を引き込む大戦争への危機をはらんでいった。

大国が話し合いをはじめ、世界大戦争をなんとか食い止めたものの、大国も自国対応優先の姿勢を崩さず、さらに互いの利害と迷惑の違いから、一時の小康状態をえただけで、大戦争を完全に回避するまでにいたらなかった。

食糧不足は改善されず、異常気象のもとで、ところかまわず襲う大雨や洪水は農作物の生育を阻害したり、土壌を流出させるだけで、水不足を解消するどころかさなる被害を増大するだけだった。また世界を彷徨う難民はつぎつぎに力尽き行き倒れていくものの、いたるところで難民の列に加わるものが絶えず、さらに数は増えこそすれ減ることはなかった。

餓死者や感染症による死者がうなぎ上りに増えていく。その一方で、世界のここかしこで小競り合いや内戦がつづいていた。各国とも増加する難民の越境を阻止しようと国境警備を強化し出していたのだ。そして次第に戦線が拡大していく。

現代科学技術文明のマイナスの倍返しは地球温暖化だけではなかった。化学物質でも見られたことだった。だがITや遺伝子技術、ナノ技術などの先端技術では、それが何倍返しになる

か、いまだにその全容が把握し切れないのだ。人類は現代科学技術文明のプラスに酔い痴れたまま、なにも気付かぬまま、絶滅していくだけなのか。

現在地球上に発生している異常気象の原因について、いまなお人類の吐き出す二酸化炭素などの温室効果ガスのせいではないと言いつ張る科学者がいるらしい。なんとおおうと個人の自由だが、もし僅かでも人間のこころを持つているなら、それを真に受け、いやいや滅んでいく人びとのいることをも考えて欲しいものだ。

専門知識を持つ科学者、権力を握る政治家や行政担当者、あるいは先端技術を駆使する大企業は、決して「想定外」だったなどと言いつをせず、つねに最悪のケースを考え、対応策を考えるべきではないのか。ことに、現代科学技術文明が限界を超えて、巨大化高度化大量化を果たしてきたことを考えれば当然のことではないか。

現代科学技術文明は人類に絶大なプラスをもたらした。だが同時に、人類に絶滅の危機へ迫りつつある。これは現代科学技術文明はプラスを巨大化高度化大量化したと同時に、そのマイナスをも巨大化高度化大量化してしまっているということではないのか。

ITから人間を超えるロボットが作り出され、人間に取って代わって人間を支配していく。遺伝子技術を駆使して、超人類をデザインしたデザインベビーが誕生し、超人類社会が作り出されていく。ナノ技術を用いて超錬金術が開花して、異次

元の世界をつくりだしていくかもしれないのだ。

そのとき、どんなマイナスが現われるのだろうか。

目の前に、荒涼とした風景が広がっている。人影はない。ヨウはハクリが去った後、眠りのなかでみた夢を思い返した。

「あれは夢でなく、現実だったのか」

上空を機械音を轟かせ、無人機が飛び交う。時折、ミサイルが尾を引いて飛んで行く。獲物を見つけたのか。それとも、生き残りの人影に反応したのか。

拡大していった戦線が、ついに大国同士の争いへと発展したのか。

日本にも無数のミサイルが飛来した。東京、大阪、名古屋などの大都市が標的だった。さらに、沿岸部に集中立地していた原発や使用済み核燃料の再処理工場など各種の原子力施設も狙われ、つぎつぎに破壊されていった。

運転中の原発は少なかったが、日本列島を取り巻くように沿岸各地に立地され、廃炉を待つ休止中の原発には、行き場のない使用済みの燃料棒が炉内や建屋内のプールに一時保管という名目で大量に残されていたのだ。これらの使用済みの燃料棒は崩壊熱を取り除くために常時冷却する必要があったが、ミサイル攻撃によって電源を絶たれ、冷却用設備も損傷を受け、冷却水の循環が途絶えてしまう。

やがて燃料棒は崩壊熱で溶融し出し、水素爆発を起こして建屋も壊われ、炉はメルトダウンの状態に陥る。建屋内にある燃

料棒の一次保管用プールも破壊され、保管中の千数百本にもおよぶ大量の使用済み燃料棒が剥き出しのまま散乱し、広範囲に高レベルの放射能を放射しつづける。やがて、散乱した燃料棒は崩壊熱で溶融し出し、核分裂がはじまるのだ。

日本では「黒の集団」が仕掛けた化学物質の高度汚染に加え、全土のほぼすべてが放射能に汚染されていった。

そのなかで、永遠の命を有するヨウとミサは、なんら為す術も無く、じつと荒涼とした風景のなかに佇んでいた。

「ヨウちゃん、どうする……」

ミサはヨウに目を向ける。ヨウは地平に目をむけたままだった。

とうとう人類は絶滅してしまうのか。ヨウは無力感に打ちのめされていた。

ヨウはふと、人類の絶滅と言いながら、絶滅すべき人間が一人もいないような気がした。もしかしたら、人類はずっとまともに絶滅してしまっていたのではあるまいか。そしていま人間面している人間は人間の皮を被った人間で、人間でない人間にすぎないのではないか。だから、すでに絶滅するような人間がいなかったのだ。

人間はいつから人間でなくなったのか。神を殺してしまった時か。それとも神になろうとした時からか。

人間が神になろうとした瞬間に、神になれない人間が生じた。それは人間としてのモラルも倫理も持ちえない人間の誕生であったというべきか。だから人間を人間と見ようとせず、人間が

人間を殺してもなんとも感じないのだ。さもなければ年がら年中戦争に明け暮れ、殺戮をほしいままにすることなんか到底出来やしない。人間はずっと前から人間としての感性を失い、人を傷つけようが殺そうがなんとも感じない人間になっていたのだ。人間はもう人間でなくなっていたのだ。

それゆえに、人間は自ら創り上げた現代科学技術文明がその意図に反してもたらず巨大なマイナスをマイナスとさえ感じることができなかつたのではないか。現代科学技術文明が人類にどんなに悪影響をおよぼそうがなんとも感じないのだ。地球がどうなろうとお構えなしで、全く自分の行為を省みることがないのだ。いや、もしかしたら、人間は人間であることと引き換えに、なんら躊躇することなく、現代科学技術文明のプラスを享受する道を選び、その代償として人間であることを辞め、マイナスがもたらす人類絶滅の危機を甘んじて受け入れようとしていたのではあるまいか。そして人類は「茹で蛙」よろしく、自ら現代科学技術文明の生贄となる道を選んだのか。

二一〇一年、ヨウとミサは人類の生き残り探しの旅へ出る。世界のどこかにまだ人間が生き残っているだろうか。

ふたりはようやく重い腰を上げる。行く先々にはなにが待ち受けているだろうか。人間社会に代わるロボット社会か、それともクローン人間あるいはデザイナーベビーの集団か、はたまた、超錬金術師たちのつくり出す偽金銀を張り巡らした欺瞞に充ちた虚飾煌めく世界だろうか。

いや、その向こうに、きっとなにかがある。ヨウとミサはさ
らに旅をつづける。

(第五卷 完)

この物語はフィクションです。登場する国や団体、組織、個人等は実在するものとなんら関係はありません。

天翔け地這う 第五卷 オセロ作戦3

生野以久男

二〇一四年一月三十一日第一版発行

(c) Ikuno Ikuno 2014

発行所 kinokopress.com

代表 森岡正博

所在地 大阪府堺市学園町一―一 大阪府立大学人間社会学部

倫理学研究室内

連絡先 www.kinokopress.com 内の連絡先に問い合わせ

本文レイアウト+デザイン 森岡正博

本書およびPDFファイルの無断複写は、著作権法上の例外を除き、禁じられています。

ISBN なし